時が、走りだす

Time will tell

夜の波間にただよう泡沫のように

満天をわたる星々のささめきのように

てのひらに舞いおりるひとひらの雪のように

第一章　三年の歳月がすぎて

一　ボク

あれから三年。

僕は十七歳になっていた。

アスカよりも頭半分は背が伸びて、陸上で鍛えたおかげか、身体も昔ほど華奢じゃなくなった。世界再建委員会（旧ネルフ）から出る退職金とアルバイトで稼ぐお金で、質素ながらもひとり暮らしを続けている。

結局日本に居ついてしまったアスカと同じ高校へ行く毎日。僕は以前にもまして無口になり、トウジとケンスケと委員長と、そしてアスカとくらいしか話をしなくなっていた。

窓際の席で頬杖をついて、そしていつも窓の外をぼーっと眺めている。

そう。

まるで、あの頃の彼女のように――

あれから三年。

綾波は、まだ、心を開かない。

僕の躊躇が、綾波の心に支えきれない負担を強いたことは事実。僕の父親である『碇ゲンドウ』を、彼女の創造主である『碇ゲンドウ』を、綾波レイに殺させたのは、あきらかに僕の躊躇だった。

その時の彼女は、誰よりも人間らしい心を持つひとになっていたというのに。

『償い』という言葉では軽すぎる。

最後まで逃げ続けた僕。最後まで逃げなかった綾波。僕はあの戦いでいったいなにを学んだのだろう。

三年たった今でも、僕はこぶしをうちつける。卑怯で臆病で逃げだしてばかりいる自分に。

意識を閉じてしまった綾波。

僕はこの三年間、自分ひとりではなにもできない綾波のそばについていた。本を読んで聞かせ、天気になれば散歩に連れていく。髪をとかして、爪もそろえてあげる。ご飯もつくって食べさせるし、お風呂にも入れてあげる。

だから、綾波の身体のことはなんでも知ってる。

けれど、心には一度も触れたことがない。触れられない。

なのに、一度も、綾波の声は聞けない。聞こえない。

学校と部活とアルバイト以外、自分の時間をすべて費やしてきた。別に見返りを求めているわけじゃないけど、この時期の三年間というのは、僕の心を疲れさせるのに十分な時間だった。

『明日か、十年後か、まったくわかりません』

三年前に担当医から宣告された言葉を僕は思いだす。

『一生かかってもかまいません！　僕は綾波のそばにいます！』

三年前に自分が叫んだ言葉を僕は何度も反芻する。

そして、今日も、疲れ切った心を引きずって僕は病院へ行く。

二　アタシ

あれから三年。

あたしも十七歳になった。

あたしに断りもなく、ばかシンジはいつのまにか背を伸ばして、今ではすっかりあたしを追い抜いちゃってるの。高校に入ってから、突然陸上部に入るなんて言いだして、体つきも少しは男らしくなったけど……。

ハイジャンプを選ぶところなんて、あいつは、あいかわらず変わってない。

あたし？　あたしは毎日アルバイトばかり。

結局最後は役立たずで終わったんだからって退職金ことわったの、今では思いっきり後悔してるわ。最後の意地っ張りだったのね、きっと。

今はヒカリと一緒に高校の女子寮で暮らしてる。彼女の姉妹は田舎の方の中学校に通ってるんだって。最初は寂しそうにしてたヒカリも、今では自分の時間を楽しくすごしてるみたい。すごくいいことだわ。年頃の女の子だもの。

あたしは、変わった。

誰かを必要とする気持ちを素直に受けとめられるようになったし、誰かに必要とされることを素直に嬉しいと思えるようになったわ。

シンジたちが最後の戦いに向かっているとき、私は夢の中で戦っていた。もう一人の自分。今までの自分。ただ見捨てられることを恐れていただけの自分と。

とても長い夢だった。けれど、みんなが、励まして、叱咤して、あたしを助けてくれた。だから、今、あたしはここにいる。エヴァのパイロットではない、ただの一高校生として。『惣流・アスカ・ラングレー』として。

でも、今も時々ママの夢を見る。呼びかけても、呼びかけても、なにも答えてくれないママ。寂しくて、寂しくて、寂しくてたまらない、ちっちゃなあたし。

三年前からあたしは日記をつけはじめた。ようやく紡ぎだせるようになった自分の言葉でママへ語りかける。今日の出来事、感じたこと。ママがいなくても元気にしてるよって。あたしはもう大丈夫だよって。そう書きつづる。

なのに。あいつは自分の心を三年前に置き去りにしたまま。ファーストの存在に心を縛られたまま。

『あんた、バカぁ？　好きになった人が振り向いてくれないからじゃないのッ！』

一年前、あたしはそう言って、シンジの頬を思いっきりひっぱたいた。あいつ呆然としてたっけ。『僕がなにか悪いことした？』なんて顔に書いてあった。

あったりまえでしょ。好きな人に『どうして恋人つくらないのさ』ってマジメな顔で言われてみなさい。このあたしでも涙が出ちゃうわよ。

あの、バカ……。本当に一生ファーストの面倒を見るつもり？
そんなことしたってファーストは戻ってこないのに。
あたしにはわかるもの。何度呼びかけても答えてくれない人もいるんだから。ほんとに、バカなんだから……。

三　人形

「また髪が伸びてきたね」
寂しげに少年は語りかける。
「今度はどれくらいにする？」
青い髪をなでつけながら、少年は訊ねる。
でも、少女からは、なにも返事は返ってこない。透き通るような紅い瞳からはなんの反応も伺えない。諦めと、ほんの僅かな期待が入り交じった視線を投げかけて、そして少年はいつものように食事の準備にとりかかる。
ここは元エヴァンゲリオン零号機パイロット『綾波レイ』専用の特別病室。世界再建委員会の長、冬月議長の特別な配慮で無期限貸与された部屋。生活するに困らない設備はすべてととのっている。
彼女が入院してから三年たった今では、この部屋を『スイートルーム』と茶化して呼ぶ職員もいない。この三年間、ほとんど毎日、朝と夜と一日に二度度訪れる少年が、明るい顔で部屋を出てきたことはないのだから。
今では、この病院で働くほとんどの職員が願う。自分がこの病院で働いている間に、一度でいいからこの少年と少女の笑顔が見てみたいと。その時はどんな幸せな気分になれることだろうかと……。
「はい、口あけて」
少年が口元へスプーンを運ぶと、少女は機械的に口を開いて食事を喉にとおす。ほとんど咀嚼することなく飲みこんでしまうので、食事にも様々な工夫がしてある。すべて少年が本を読んだり、病院の職員に聞いてつくったものだ。
「ほら、こぼさないで」
少年は真っ白いナプキンで、なされるがままの少女の口元をぬぐう。昔はこんなことでも涙を流していた。でも、今はもう、涙は出ない。
食事を食べさせ終えると、今度は自分の食事をつくる。そして後片づけを終えると、時間は八時をまわる。宿題を済ませるころには九時。それから少年は色んな本を読んで聞かせる。少女がなにも聞いていないことはわかっていたけれども……。
唯一彼女に反応があるのは『肉』。これだけには、決して口を開かない。
それは希望を、残酷な希望を少年にもたらす。
それは、少女が生きている証。
それは、少年が期待を持ち続けなければならない鎖。
少年は月に一度、肉料理をつくって少女に食べさせようとする。それはまるで儀式のようにこの三年間続いていた。
『もしも彼女が口を閉じなくなったら？　僕はなにを支えに生きていけばいい？　自分ひとりではなにもできないのは今の綾波ではなくて、僕なんだ。死んでいるのは、僕なんだ』
少年は儀式の一週間前くらいから、そんな悪夢に悩まされる。だが、まだ、悪夢が現実になったことはなかった。

「おやすみ」

電気のスイッチを消して、今日も少年は病室を後にする。
アパートへ戻れば後は眠るだけ。
朝が、早いから。
綾波が――待ってるから。

第二章　錯綜する想い

一　焦げつく太陽

太陽。

蝉。

西瓜。

日本に季節が戻ってきて、三度目の夏がやってきた。シンジをかよわく見せていた細い身体の線は成長とともに姿を消し。そして陸上部に入部して二度目の夏、白かった肌も、今はすっかり日焼けして浅黒い輝きを見せていた。

シンジは、そう、少年の危うさと、大人の落ち着きを併せ持つ『十七歳』になっていた。

寡黙で、瞳にいつも暗い影を落としているシンジは、クラスでも異色の存在であった。

成績はいつも上位をキープ。もちろん、これはアスカのお節介があってのことなのだが、シンジ自身がいつ綾波が目を覚ましても大丈夫なように、常にノートをとっておくことを忘れなかった事も大きな理由の一つ。

ハイジャンプも県大会で上位に入賞するほどの成績を上げ。すらりと伸びた手足を美しく操りながら、ただ一人、黙々とハイジャンプの練習に打ち込むシンジに、好意を寄せる生徒は少なくなかった。

土曜日、炎天下の校庭。

シンジは基礎トレを三セット終え、汗だくになって木陰で仰向けに寝転がっていた。目をつぶると、聞こえてくるのは、野球部のかけ声と蝉の鳴き声だけ。噴き出す汗をそのままに、熱を持った身体をそよ風にさらしていた。

誰かが近づいてきたような気配がして、シンジは目を開けた。

見慣れた顔が視界に飛び込んでくる。スカートを押さえつけたアスカが、シンジの顔をのぞき込んでいた。

「頑張ってるわね」

アスカの声は、とても、優しかった。

「まあね。県大会が近いから」

シンジはぶっきらぼうに言葉を返す。

「今度は優勝できそう？」

「さぁ」

まったく興味なさそうに答えると、シンジは再び目を閉じる。三年前のアスカなら、こんな態度をとるシンジの頬を間髪いれずひっぱたいたところだろうが、三年間の歳月はアスカを数倍も忍耐強くしていた。

「……水、持ってきてあげよっか」

「別にいいよ」

握りしめていたアスカのこぶしに一段と力が入った。

「あっそぉ。友達の少ない暗い少年がひとりで寂しそうに練習してるから、ちょっと励ましてやろうかと思ったのに。そーゆー態度とるワケね」

爆発しそうになる感情を抑えながら、それでもアスカは努めて優しげな声を出そうと試みた。

シンジが小さな声でつぶやく。

「ごめん……暑くてイライラしてるんだ」

シンジの言葉に、アスカは、ふぅっと小さく溜息をつく。
「ったく、なんでも謝る癖だけは三年前から直んないわね。ま、でも、今のはシンジが悪いんだから、謝るのは当たり前だけど」
ひょいっと、アスカがシンジの傍らに腰をおろした。風に流される栗色の髪を手で押さえつけながら、隣に横たわるシンジをアスカは見つめる。
いつのまにか見違えるくらいたくましくなったシンジ。
でも、心だけは三年前に置き去りにしたままのシンジ。
あたしがそばにいるというのに、その腕で顔を覆ったまま、一度もあたしの顔を見ようとしないシンジ。

蝉の鳴き声と、風が木の葉を揺らす音だけが、二人の耳を支配していた。
「先輩、今日はこないよ」
沈黙を破ったのは、シンジだった。
「知ってるわよ」
思いがけないシンジの言葉に、アスカは思わず語気を強めてしまう。
「じゃ、なにしにきたのさ」
「あら。先輩に会いにくるためじゃなければ、あたしはここにきちゃいけないわけ?」
「別にそんなこと言ってないけど。いつもだったら、せんぱ〜いって黄色い声あげて行ってるだろ」
アスカは再び爆発しそうになる怒りを抑えながら反撃を試みる。
「あ〜らシンちゃん。もしかしてやきもち焼いてんのかしら」
しかし、かつてのような反応は、今のシンジには、もはやない。
「別に」と、ひとこと答えるのみである。
ほとんど感情を表さないシンジに、アスカはなぜか、いや理由がわかっていたからこそ、無性に腹が立ってしまう。
「あたし、帰る」
アスカが離れていく気配を、シンジは感じた。

三ヶ月前。
アスカから、うちのキャプテンとつきあってるということを聞いたとき、僕は確かに、彼女がどこか遠いところへ行ってしまったような喪失感を味わったはず。
アスカがずっと一緒にいてくれるわけがないのはわかっていたけど、あっさりと自分よりも親しい男――『恋人』と呼べる存在を作ってしまったことは、一時の間、綾波のことが気にならなくなるほど胸が苦しくなったはずなのに。
それが、いまでは、もうなにも感じない。
そういえば、高校一年の時、知らない女の子から初めてラブレターを貰ったときもなにも感じなかったっけ。
なにもかもがどうでもよくなりつつあるような、この感じ。
また、エヴァに乗る前の自分に逆戻りか。

上半身を起こして、シンジはうつむいたまま自嘲気味に笑った。汗が、額を、鼻を、首筋を伝って地面に吸い込まれていく。
校舎の時計に目をやると、休憩の時間はちょうど終わりを告げていた。シンジは腰を上げて、再び炎天下の校庭へ身体をさらけだす。
そして、ただ黙々と、なにかにとりつかれたように、バーを飛び越え続ける。

二　西瓜

「ごめん。病院に行かなくちゃならないから」
今日も一人、練習を終えて学校を後にしようとしたシンジに声をかける生徒がいた。今年入部したばかりのマネージャーの一人である。
そして、こうやって、シンジに断られた生徒は、いつの間にか片手では数えられないほどの人数になっていた。
「……すいません。妹さんの看病も大変ですね」
少女は、歩きだしたシンジに慌てて追いつくと、横に並んだまま口を開く。
綾波レイはシンジの妹として戸籍上処理されていた。無用の混乱を与えぬようとの、冬月議長の配慮である。
少女は勇気を振り絞って言う。
「あの……私になにか手伝えることありませんか？」
シンジはちらりと、頬を紅潮させている少女に顔を向けた。
「ありがとう。でも、君には関係がないことだから」
「そう……ですか。それじゃ、これで失礼します」
少女は諦めの表情を浮かべて足を止めた。シンジの瞳が自分ではなく、自分の向こう側を見ていたような気がしたから。
そのまま歩みを進めて校門を出たシンジは、かなり傾いてきた太陽を仰ぎ見て心の中でつぶやく。
そろそろかな……。
シンジは病院に間借りしている農園の西瓜に思いを馳せた。
ある人の形見。
今年も立派に育った。
今年も綾波と一緒に食べよう。
どうせ味なんてわかんないだろうけど。
シンジは自嘲気味になるのを、かろうじて防ぐ。
君には君にしかできない、君にならできることがあるはずだ。誰も君に強要はしない。自分で考え、自分で決めろ。自分が今なにをすべきなのかを。後悔の無いようにな。
今は綾波のそばにいること。自分で考え、自分で決めたこと。後悔はしていない。
シンジはそう自分に言い聞かせるしかなかった。

三　一円玉

「アスカ、碇君がきてるけど……」
「知ってるわ」
従業員の控え室で防犯カメラのモニターを見つめながら、アスカはバイト仲間に返事をかえした。
ここは、アスカの主たる生活費の稼ぎどころであるコンビニエンスストア。シンジの帰り道でもあるためか、しばしば彼が買い物に寄ることもある。

休憩時間になってアスカがこの控え室に入ってきてから、一分と経たないうちにシンジは現れた。
その時からずっと、アスカはシンジの行動をモニター越しに追っている。すぐに買い物をするでもなく、手持ちぶさたにうろうろしながら、時々レジの方を盗み見しているところをみると、アスカに会いに来たのは誰の目にも明らかだった。
アスカがすぐ表に出ていかなかったのは、冷静に対応できるようになるまで心を落ち着ける時間が欲しかったのだろう。
謝りにでも来たつもりかしら。
アスカは、そんな想像をして少し心を和らげる。
三分ほど経って、アスカはようやく腰を上げた。

アスカがレジへ出てきたのを見つけると、シンジは慌てて買い物かごをガタつかせながらレジへと向かった。
「いらっしゃいませ」
事務的に口を開いた後も、アスカはシンジと目を合わせようとしなかった。
ピッ。ピピッ。次々とバーコードが読みとられていく。
「あ、あのさ」
シンジが周りを気にしながら――こういうところは、まだあいかわらずなのだが――アスカにささやく。
だが、アスカは手を休めないし、なにも答えない。
少し間をおいて、シンジは言葉を続けた。
「今日、西瓜切るんだけど、よかったらアスカも病院に来ない？」
ぴたりとアスカの手が止まる。レジの計算はちょうど終了していた。
うつむいたまま品物を袋に詰め、どかっとシンジの前に置くと、アスカは大きく広げた手のひらをシンジの目の前につきだした。
「千百九十八円のお買い上げになります」
それっきり十秒は沈黙が続いただろうか。アスカがなにも反応しないのを見て、シンジは返事を聞くのを諦め、仕方なく千円札を一枚と百円玉を二枚、アスカの手のひらの上に乗せた。
お金を渡されてもアスカはしばらく身動きひとつしなかった。髪がうつむいた顔にかかっていて、シンジにはアスカの表情を見て取ることができない。渡されたお金をぎゅっと握りしめると、アスカは身体を震わせた。
長い付き合いから、これ以上ここにいても状況を悪化させるだけだとシンジは判断し、お釣りを諦めてお店を出ようと歩きだす。
自動ドアが開いて、外に出ようとしたシンジの背中に、罵声とともに、なにか軽いモノが二つ投げつけられた。
「ばかシンジッ！」
驚いて振り向いたシンジの目には、奥の控え室に駆け込むアスカの後ろ姿しか見えなかった。
足元にはお釣りの一円玉が二枚。
くるくる、くるくると回り続けていた。

シンジのバカ！
バカッ！
おおバカッ!!
あんたとあたしとファーストで、どんな顔して食べろっていうのよ！
あたしはそんなに心の広い女じゃないんだから。みんなが思ってるほど割り切れる女じゃないんだから。

アスカは控え室の壁にもたれかかりながら心の中で叫んでいた。

ごめんなさい、加持さん。

今年はあの西瓜、食べられないかもしれない……。

あたし、あたし……。

悲しいのはアスカ。

悲しいのはシンジ。

悲しいのは、チルドレン――

第三章　信じるココロ

一　病室に潜む闇

僕は今日もここにいる。
綾波の、そばにいる。

一般の病棟から少し離れたところにあるため『綾波レイ』の専用病室は今日も静かだった。
隔離されているのは、もちろんシンジの心情をおもんばかってのことだけではない。国連直属の非公開組織、超法規的国際武装集団であったネルフの実像を暴き出そうとする輩の目から逃れるためであり、また現在でも世界再建委員会からレベルAの監視が義務づけられている元チルドレン（適格者）という肩書きのためでもあった。
隔離病棟の中にひっそりと病室が設けられているのはそのためである。

シャッ。

僕は窓辺に近づき一息にカーテンを開けた。穏やかな月の光が差し込んでくる。もともと白い綾波の肌は、月光を浴びるとまるで銀色のように輝く。
『月』――綾波のイメージ。

エヴァに乗っていた頃はそんなこと思いもしなかったけど、今、こうなる前の綾波を思い出そうとすると、必ずと言っていいほど月とともに彼女はいる。
月をバックにたたずむ、プラグスーツに身を包んだ綾波。
初めて会った頃は、その紅い瞳に敢然たる決意を秘めて、ただ一人――僕の父『碇ゲンドウ』のみを見つめていた。
けれども、それから長い戦いの果てに綾波は変わった。見知らぬ感情に戸惑い、自分の存在に疑問を抱き、父のシナリオに同期しなくなっていった。
そして最後は、自らの手で、すべてを打ち壊した。

僕は、いつもカーテンを開けて、綾波を月の光で照らしてみる。なにか反応はないだろうかと、微かな期待を込めて。
もちろん、これまではなにもなかった。
そして、やはり、今日もなにも起こらない。

なんだか本を読んで聞かせる気分にはなれなかったので、今日の僕はＴＶをつけて綾波のそばでぼんやりすることにしていた。ニュース番組のアナウンサーがしゃべる人間味のない声が耳に入ってくる。
『……で、今日未明、二人の死体が発見されました。警察では、残された遺書から判断して、寝たきりの母親の看病を苦にした息子が自殺を図ったのではないかとの見方を強めています……』

こんなニュースを聞く度に、最近の僕は、綾波の細い首を見つめてしまう。白い透き通るような首筋に、僕の目は吸い寄せられてしまう。

心の中で僕は手を伸ばす。
綾波の目はなにも見ていない。綾波の心はなにも感じていない。綾波はなにもわからない。
僕もなにも見ていない。僕もなにも感じない。僕も一緒に消えるから。

『生と死は等価値なんだよ』

カヲル君の言葉さえも、今は皮肉に聞こえてしまう。
けれど、綾波の首に手をかける寸前で、僕の妄想は必ず途切れてしまう。

また、逃げようとしているね。

どこからか語りかけてくるこの言葉に、僕の妄想は閉ざされる。そしていつものセリフ。

逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ……

僕は何万回このセリフを頭の中で繰り返しただろう。そしてあと何度同じセリフを繰り返せば救われるのだろう。
初めてエヴァに乗ったときのことを思い出しながら。エヴァに乗って戦いを続けていた日々を思い出しながら。綾波に父さんを殺させてしまったあの時を思い出しながら。
僕は、また心の中で呟く。

そう――まだ、逃げちゃダメだ。

二　涙、止まらず

重苦しい気持ちのまま、僕はアパートへと帰りついた。機械的に郵便受けを探ると、今日は珍しくなにかが手に当たる感触があった。
一通の封筒。中身は一枚のＤＶＤ。差出人は『青葉シゲル』、そして『伊吹マヤ』。連名だった。
久しぶりに目にする懐かしい名前に、少しだけ心が軽くなって、僕は二段飛びに階段を駆け上がった。
部屋に入るとすぐにカバンをベッドの上に放り投げて、あまり使われないままほこりをかぶっていたプレイヤーへディスクを挿入する。
わずかなノイズの後、クリアーな画像が流れ出してきた。
懐かしい顔！　青葉さんだ！
サングラスをかけて、暖かそうなソファーに腰掛けている。
『シンジ君。元気にしてるかい？』
カメラの向こうの青葉さんは、簡単に挨拶をすると、思い出したようにサングラスをはずした。
素顔が、現れた。
僕は、その見慣れない顔をあいかわらず正視できない自分に嫌悪感を感じてしまう。
青葉さんは、最後の戦いの時に起こった本部の大爆発に巻き込まれて、左半身に大きなやけどを負った。特に顔面が酷く、左目の視力は今も回復しない。あの長かった頭髪も左半分は無くなり、二度と生えてこなくなった。

皮膚を移植する手術を行えば、ほとんど見た目にはわからなくなるくらい回復できるという話を、青葉さんは断固として受け入れなかった。

これは、俺の大切な思い出なんだよ。碇司令や葛城三佐、赤木博士、加持さん、それから何百人の職員たち。彼らの死を忘れないために、ネルフにいた自分を忘れないためのな。

傷を負う前とまったく変わらない調子でしゃべっていた青葉さんを、僕は思いだす。確かあれは第二新東京市へ引っ越す青葉さんを見送りに行った駅のホームだった。

強い人だ――僕はその時あらためて感じた。

ネルフを退職した今、青葉さんは売れないバンドでギターを弾いてるそうだ。一度だけ、第二新東京市に行ったとき、小さなホールで演奏しているのを聞いたことがある。

上手いのかどうか僕にはよくわからなかったけど、青葉さんが本当に楽しんでいることだけは感じることができた。

そして今は、世界再建委員会の冬月さんの下で働いているマヤさんと一緒に暮らしている。結婚は、しないそうだ。

でも、きっと、二人は死ぬまで一緒に違いない。

他人のことなのに、僕は確信を持って言える自分に驚く。自分の決断にさえ自信が持てないというのに。

『やっほー。シンジ君、元気してる?』

がばっと、青葉さんを後ろから抱きすくめる格好で、画面にマヤさんが現れた。

かわってないや。あいかわらず若々しい。にこにこしながら、こっちにむかってピースサインなんか出してるんだもんな。

突然抱きつかれた格好の青葉さんは、ちょっと照れくさそうにマヤさんをふりほどいて言った。

『あっち行ってろよ。俺が話してるんだからさ』

マヤさんは少し不満そうに頬をふくらませたけど、青葉さんがジト目でにらんでいるので、仕方なく画面の外へ消えて行こうとした。

『いいじゃない少しくらい。けち。じゃ、シンジ君、また後でね』

手を振って画面の外に消えていったマヤさんに、僕は子供みたいに思わず手を振ってしまい、一人部屋の中で顔を赤くしてしまった。

『ところでな、シンジ君』

青葉さんはマヤさんが画面の外に出たのを確認すると、再びこっちに向き直って口を開いた。

『アスカちゃんからマヤんとこに届いてる手紙の話、ちょっと聞かせてもらったんだけど、あんまり思い詰めるなよ。できる限りのことをやって、それでもだめだったら諦めてもいいと思うぜ。きっとレイちゃんも望んでないさ。シンジ君の一生を縛りつけることなんて』

青葉さんの言葉は続き、優しさが僕の身にしみる。

わかってます。綾波が望んでないこともわかってます。

でも僕が望んだことですから。自分で決めたことですから。

だけど、最近、自分が怖くなるときがあるんです。

僕はどうすればいいんですか?

僕になにができるんですか?

アヤナミハ、メザメルノデスカ?

涙が、落ちる。

久しぶりに流した涙は、いつまでも止まらなかった。

第四章　想い

一　トドキマスカ？

いつもの帰り道。デートが終わった帰り道。

『そこの公園で、もう少し話していかない？』

先輩がそう言ったとき、あたしはきっとこうなることを予感していた。

あたしがつきあっているのは、シンジが入ってる陸上部のキャプテン。

外見は当然かっこいいし、頭も悪くない。短距離の選手で、全国大会にも出場するほどの実力。少なくとも、あたしが通う高校では一、二を争うほどのいい男。それは、他のみんなも認めてる。

でもつきあう気になったポイントは、センスがいいところ。服のセンスとかじゃないの。人づきあいのセンス。

お互いが気持ちいい距離を見つけてくれる。やたら相手の心に踏み込まず、かといって自分の心を隠すでもない。ちょうどいい距離。それが、先輩の優しさ。

学校ではもちろんベストカップルでとおってるわ。なにしろ、あたしと先輩なんだもの。

ヒカリが一度言ってたっけ。『碇君へのあてつけなら、やめたほうがいいわよ』って。

でも、そんなぶぁかなことは、ぜぇったいにありえない。あのスカタンと比べたら、先輩が可哀想になるわよ。

そう。ちょっと加持さん似の先輩が、あたしの恋人。そして今、あたしはその先輩とキスをしようとしている。

今までも何回かそんな雰囲気になることはあったけど、あたしが逃げてたような気がする。なにかうまく言えないけど、そんな気分にはなれなかったから。

でも、別に、キスくらいって、今日は思える。

もう十七歳だしね。遅れてる方なんだから。

だからあたしは目を閉じた。じっと先輩の唇が触れるのを待っている。目を閉じて、ただ待っている。

先輩の大きい手があたしの顎をそっと支えてくれた。

あったかい。壊れ物を扱うような優しい手つき。

先輩の顔が近づいてくるのがわかる……。

あと少し……10cm……5cm……3cm……。

鼻息がくすぐったいかな……。

突然、目を閉じたシンジの顔があたしの脳裏に浮かんできた。ガチガチに緊張して、あたしのキスを待ってたあいつ。抱きしめることも、優しい言葉をかけることもできなかったあいつ。

……だ。

……やだ。

「やだ！」

あたしは思わず大声を出して先輩を押しのけてた。先輩がびっくりした顔であたしを見つめてる。

「ご、ごめんなさい……」

あたしは謝ることしかできなかった。先輩は一瞬だけ悲しそうな目をした。胸が、痛くなった。
ちょっとだけ空を見上げた後、先輩は言った。
「彼……だろ」

――そう、あいつなんです。

「ごめんなさい」
「いいよ、気にしないで。謝られたら、いっそう俺がなさけなくなっちまうじゃないか」
あたしは先輩の優しさに最後まで感謝して、大きくおじぎをした。やっぱりいい男だったわ。あたしの目に狂いはなかった。
でも、と、あたしは振り返る。
解き放たれた小鳥のように駆けだす。
公園の出口を通り抜け、歩道へ飛びだしていく。

あいつじゃなきゃだめなの。やっぱりあいつしかいないの。あたしと似てる。あたしと同じ。同じ時を過ごして、同じように過去の傷と戦ったあいつ。
いつだって他人のことばかり気にして、自分を責めてた内罰的な男。D型装備も付けないでマグマの中に飛び込んであたしを助けた男。
人づきあいが苦手で、いつもあたしを苛立たせて、それなのに、いつのまにかあたしの壁を乗り越えて。誰にも言わなかったことまで、ぺらぺらとしゃべらせた男。
知らない間にあたしの心の中に住みついていたの。

気がつくと、あたしはすごく軽い足取りで寮に向かっていた。
早くママに伝えなきゃ。昨日書いたことは気の迷いでしたって。
やっぱり、あたしはシンジが大好きだって！

二　トドキマシタカ？

また儀式の日がやってきた。
綾波に『肉』を食べさせる日。
綾波が生きていることを確認する日。
僕がまだ逃げられないことを心に刻みつける日。

僕が食事をつくっている間も、綾波はどこか焦点の定まらない視線で、じっと、じっと白い壁を見つめていた。
そこになにがあるのだろう。
いったいなにが見えているのだろう。
いくら考えてもしょうがないことだけど、そんなことを思いながら僕は料理を続ける。食欲をそそるにおいがキッチンに充満する。
よし。我ながら上出来のステーキができあがった。
自炊生活も、あの頃を加えればもう軽く三年を過ぎていた。自分で一口食べてみて、うまい、と心の中で思ってしまう。
そして、そんな自分が悲しくなる。
綾波がこんな風になっているそばで、おいしいと感じてしまう自分が腹立たしくなる。空腹感をおぼえる自分が醜い生き物のように思える。僕は消えたくなる。

――でも、まだ、もう少しだけ。

気を取り直して僕はお皿に料理を移した。そしてベッドのそばまで運んでいくと、椅子に腰掛けて大きく深呼吸をする。
大丈夫。これまで二十八回もこの儀式は成功してきた。今日も成功するはずだ。根拠のない確信を持って、僕は箸を取り上げた。
肉をひと切れつまんで、そして綾波の口元に運ぶ。緊張のあまり、箸先が震える。
綾波は口を真一文字に結んだまま開かなかった。いつもの食事だったら口を開く距離に持っていってもまだ開かない。
僕は体中の力が抜けていくのを感じた。良かった。まだ、望みはある。
僕は肉をお皿に戻すと、頭を垂れ、ぎゅっと綾波の手を握りしめた。
強く。ただ強く。
綾波の体温を感じたかった。冷たい指先が気持ちよかった。

「……る」

――――?

その時なにかが――はっきりとはわからなかったけど、なにかが起こった。
なんとなく、声のようなものが頭の上から聞こえたような気がしたので、僕はゆっくりと顔を上げた。
心臓がばくんと跳ね上がったような気がした。

「……じわる」

再び、声が聞こえた。今度は耳だけでなく目でも確認できた。
確かに、目の前の、青い髪と紅い瞳を持つ少女が口を開いた。
僕の目と耳がおかしくなければ、彼女が言葉を発したのは確かだった。

「私が肉嫌いなこと、知ってるくせに」

――感じる。

その声は限りなく優しく、涙に潤んだ紅い瞳は僕の心臓を鷲掴みにして離さない。

――僕の心が動き出すのを感じる。

僕は、ようやく口を開くことはできたけれども、そこからなにを発すればいいのか、わからなかった。ただ、呆然と、見つめるしかできなかった。こんな時、どんな顔をすればいいのかわからなかった。

「あの時みたいに笑ってくれないの?」

目の前の少女は、はにかみながら言った。
その言葉を聞いて僕は今度こそ、本当に確信を持った。

綾波だ……。

やっぱり綾波だ!

綾波が目を覚ましたんだっ！

僕はなにも言えず、ただ涙を流して笑った。
綾波もこぼれる涙を拭おうともせず、ただ笑った。
涙を流している綾波。僕に笑顔を見せる綾波。

あまりにも突然で、いきなりで、予期しなかったことに、僕はただ心の中で思うしかなかった。

死んでもいい。
もう、思い残すことはない。

僕は、本気でそう思った。

三　オワリノハジマリ

淡い月の光が二人を照らす。
感情の高ぶりが落ち着いた後の静寂。
少年の視線はただ、じっと少女の横顔に注がれたまま。まるで、目を離すと彼女がこの世から消えてしまうと決め込んでいるかのように。
そして少女も、その視線を感じることで安心感に包まれていた。

毛布の上から膝を抱え込んだまま、少女は言葉を紡ぎだす。

「碇君がいつもそばにいてくれたこと、私、知ってたような気がする。とても暖かい光が私をずっと包んでた……」
少女は少年の瞳を見つめる。
「眠っている間も、ずっと幸せだった」

解き放たれる少年の心。

「今は……もっと幸せ……」

じっと二人は見つめ合う。なにも言葉は要らない。お互いのすべてが信じられる。二人は、そんな気がしていた。

――止まっていた時が、再び走りだす。

第五章　新しい生活、新しい関係

一　現実、そして真実

第二新東京市。世界再建委員会ビル。最上階議長室。
冬月はデスクに肘を突いて、疲れた顔で伊吹の定例報告を受けていた。伊吹は淡々と手元の資料を読みあげている。
「……中国のE計画資料隠蔽について、MAGI-Sは67.2％の可能性を示唆しています。さらに、新型二足歩行兵器への技術転移の可能性として12.6％の数値がはじき出されました」
冬月は目を閉じたまま口を開いた。
「日向一尉へデータを転送しておいてくれ」
伊吹はうなづいてさらに言葉を続ける。
「それから、元エヴァンゲリオン零号機パイロット『綾波レイ』が、本日十九時四十二分をもって目覚めました」
冬月の疲れた顔に一瞬明るい輝きが戻る。
「なに!?　それは本当か?」
「はい。シンジ君が付き添っていた時だそうです」
伊吹の顔にもこぼれるような笑顔が浮かんでいる。
「そうか。ようやく目覚めてくれたか」
冬月は立ち上がって窓辺に歩み寄った。そして街の光で霞んでいる星空を見上げる。
「それで、容態は?」
わずかに伊吹の表情が曇った。
「今のところは……」
「そうか。奇跡が続けばよいのだが」
「そうですね……。大丈夫ですよ。きっと続きます」
「とにかく、状況観察を怠らぬように」
「はい。全力を尽くします」

二　彼女とぼく

綾波が目を覚ました。
何回も精密検査を繰り返して、綾波が退院できたのはあれから一週間後だった。お祝いに第二新東京市から青葉さんとマヤさんまでやってきた。トウジや委員長、アスカたちと一緒に、綾波の退院をお祝いした。
残念なことに日向さんは仕事で来られなかった。E計画の後始末とかで、いまだに世界中をかけずりまわってるそうだ。またあのモノマネを見たかったのに。
とても楽しい再会だった。手紙に書かれていた様子とあまりにもちがうって、マヤさん、びっくりしてたな。仕方ないか。僕自身も自分の変化に驚いているんだから。
すべてが明るく見える。なにもかもが楽しく感じられる。誰にでも優しくできる。
そして今日から、綾波と一緒に学校に行ける。
戸籍上は兄妹ということになってるんだけど、やっぱり一緒に住むのはまずいって、結局綾波はアスカや委員長と同じ女子寮に入ることになった。
……ま、これは、仕方ないよね。
生活の面倒は主に委員長がみてくれてる。妹ができたみたい

で、すごく楽しそうに世話を焼いているという話だ。
アスカは……あまり喜んでいなかった。
昔っから仲が悪かったけど、ようやく目覚めた綾波にあんな態度をとるなんて、僕はアスカに失望した。
でも綾波はアスカの気持ちがわかるって言うんだ。だから優しくしてあげてって。
うん。わかってる。僕も、もう子供じゃない。

そして今、僕は綾波と一緒に学校へ向かって歩いている。
「あやや、あああっといい天気だね、レイ」
思わずいつものように『綾波』と呼んでしまいそうになるのを必死でこらえて、うわずった声で僕は呼びなれない言葉を絞り出した。
「そうね。お兄ちゃん」
そんな僕を、綾波はおかしそうに見つめてくれる。僕はちょっと耳が赤くなったような気がした。
綾波は『お兄ちゃん』と言う呼び方がとても気に入ったようで、なにかとそのくすぐったい呼び方で僕に話しかけてくる。
なんだか変な感じだった。
綾波のことを『レイ』と呼ぶ僕。
僕のことを『お兄ちゃん』と呼ぶ綾波。
でも、奇妙なほどに、肌に馴染むこの感覚。

そう、これでいい。

今は、これでいい。

三　彼女とあたし

ったく、誰よぉ。せっかくいいトコロなのに……もぉ……。
お気に入りのドラマを見ていた時、その電話は鳴った。
『あ、あの、綾波です』
声を聞いてあたしは驚いた。同時に目の前が真っ暗になるような感覚を味わった。

――ファーストが、目覚めた。

すぐに交代したシンジの声も、あまり耳に入らなかった。ファーストの目覚めを素直に喜べない自分が、そこにいた。
病院に回復のお見舞いに行ったときも、あたしはすごく場違いなような気がした。みんな心の底から喜んでいるのに、あたしは違う。
嫌な女。汚い女。嫉妬なんかに負けてしまうほど心の弱い女。この時、あたしは、本当に自分のことが嫌いになった。

そう。確かに始まりは、思ったよりひどかった。
けれども、彼女が寮に越してきて、それは変わった。
ともに生活をするようになって、あたしは昔に比べて彼女の変わりように驚いた。あまりにも純粋で、傷つきやすい感情を、いつの間にか彼女は取り戻していた。
あたしが『人形』なんてひどく罵った時と同じ人物だとは思

えない。眩しくて、自分が消えてしまいたくなるくらい、純粋だった。
　そんな彼女に嫉妬していた自分が、つまらない人間に思えた。
「ヒカリ、違うわよっ！　そうじゃなくて、こうした方がレイには似合うってば」
「なんですって！　理容師志望のわたしのセンスにケチつける気ぃ!?　だいたいアスカは派手好きなんだから。レイちゃんにはこういう落ち着いた感じが似合うのよ」
「それが、ババくさいってのよ」
「ア・ス・カ……言っていいことと、悪いことがあるわよ……」
「あ、あの、私、普通でいいから。ケンカ……見たくないから」

　そして悲しそうな目をするレイに、慌ててあたしとヒカリは謝る。よくある光景。いつもの会話。
　確かに、シンジがファーストを――レイを見つめる度に、あたしの胸は苦しくなる。
　でも、レイがあたしのことを『アスカさん』って呼んでくれるのは、こそばゆいほど気持ちいい。彼女があたしを慕ってくるのが、ものすごくいとおしい。女の子らしいことなにも知らないまま育った彼女が、すごく可哀想で、色々とかまってあげたくなる。
　それがシンジの心を彼女に向けさせることになっても、満たされた気持ちにあたしはなれる。
　苦しいけれど、気持ちいい。

　そう、これでいい。

　今は、これで、いいじゃない。

四　私

山、緑が息づく山、時とともにその姿を美しく変えるもの。
空、白い雲を浮かべる空、気持ちいい風を与えてくれるもの。
太陽、みんなの心にあるもの。温かいもの。
水、嫌な気持ちを洗い流してくれるもの。
花、綺麗な色がいっぱい、いい香りがいっぱい。
街、人が住んでいるところ。心がたくさんあるところ。
エヴァ、もうあたしには必要ないもの。
人はなに？
神様が創り出したもの？　人は人が創り出したもの？
私にあるものは命、心、心の入れ物。私にもあるの、心。
エントリープラグ、これ、もういらない。
私は誰？　私はなに？　私は私。
私は綾波レイ。私は碇レイ。私は私。

私は自分、この物体が自分、自分を作っている形、目に見える私、私はここにいる。確かに存在する。私として。

碇君、この人知ってる。
壊れやすいくらい優しい心を持っている。

アスカさん、この人も知ってる。
昔、嫌いだった。でも、今は好き。

伊吹さん。青葉さん。日向さん。洞木さん。鈴原君。相田君。
みんな知ってる。

葛城三佐、赤木博士、もういない。

碇司令、もういない。

昔の私、もういない。

第六章　スクール・デイズⅠ

一　僕を取り巻く世界

綾波は『碇レイ』として、僕の双子の妹として、同じクラスに編入された。すべて冬月さんのおかげだった。これまでもなにかと力を貸してくれて、僕はすごく感謝している。

『父さんの分まで償いをさせてもらうよ』――冬月さんは、いつかそんな言葉をかけてくれた。

父さんと同じ種類の人の世話になるなんて、最初はいやだった。けど、これは僕だけの問題ではないと気づいて、それから素直に頼れるようになった。冬月さんも苦しんでいることがわかったから。

綾波が綾波であったことを知るものは、もうこの学校にもほとんどいない。

三年前、すべてに決着がついた後、適格者としての必要性がなくなったクラスメートの大部分は故郷に帰っていった。この街は、そのまま生活を続けるには、あまりにも傷跡が深すぎたから。

残った人たちにも、エヴァンゲリオンについて口外することは厳しく禁じられ、三年たった今では、僕たちもすっかり普通の高校生として暮らすことができるようになっていた。あの頃の話をすることがあるとすれば、それは、トウジやケンスケ、委員長と話すときくらいだ。

綾波が目を覚ましてからというもの、僕はいろんな事を思うようになった。三年間、なにも考えずに生きてきた分を取り戻そうとしているかのように。

綾波レイ。

僕にとってあいかわらず謎の存在であり続ける綾波。

よく考えると、僕は綾波のことをなにも知らない。エヴァに乗っていた頃、そして眠り続けていた三年間。綾波と話をしたのは、出会ってからいったい何度あるというのだろう。

でも僕の心は初めて会ったときから、いや直接会う以前から、ずっと彼女に囚われている気がする。それは明確な形を持って僕の心にあるわけではなく、僕自身も綾波に対する気持ちがまだよくわかっていない。

そして、あのセントラルドグマで見た光景。壊れていく綾波たち。僕はあの時現実から逃げ出していたから、霞がかかったような記憶しか存在しないけど。在ってはならないものを見たような気がする。

綾波がどういう存在なのか、結局最後まで知ることはなかった。

でも、たぶんそれは知らなくてもいいこと。

知っていても、今の綾波が変わるわけじゃない。

それに、綾波のことを知る時間は、まだ、これからずっとあるのだから。

そしてトウジ――フォースチルドレン。

僕はまだ悔やんでいる。あの時もっといいやり方があったはずだって。初号機の力を持ってすれば、父さんの言いなりにならなくてすんだはずだって。

僕は今も、義足を付けて松葉杖をついているトウジを見ると、

罪悪感に悩まされる。
トウジは何度も気にするなって言ってくれて、一度なんか『ええ加減にせぇや！』って殴られたこともあった。
それから、僕は口に出すことをやめた。
でも、ごめん。僕、まだ気にしてる。
そのトウジは、今もバスケを続けている。ついこの間の車椅子のバスケットボール選手権大会では、全国優勝するほどの実力になっていた。高校の一般のバスケ部にも所属していて、ここぞという時の3ポイントシューターとして活躍している。
義足というハンディキャップは、トウジの精神力の前ではなんの意味も持たない。
僕は知っている。トウジという男を。
だから、妹が亡くなった時も涙一つ見せなかったトウジのために、僕は泣いた。傲慢な理由かもしれないけど、僕は、トウジの悲しさを思って泣いた。

三バカトリオのもう一人。ケンスケは戦自の工科学校に進学した。
エヴァのパイロットになるという夢は、三年前のあの事件のせいで、もはや果たすべくもない。だから今度は戦自に正式採用された『JA改』のパイロットになるという。
あんな危ないモノ――随分改良されたとはいえ、核融合で動くような代物に乗る勇気がある奴は、ケンスケぐらいしか……いや、そういえば、競争率が百倍を越えてるってこの前電話で話してたな。ロボフェチって、意外といるもんだ。
ケンスケは、もしかしたらこの三年間で、一番僕の助けになってくれてたかもしれない。
誰と口をきいてもイライラしていた時期でも、ケンスケとだけは気楽に話すことができた。絡みついた糸をほどくように、ケンスケは巧みな話術で、僕の心をときほぐしてくれた。丹念に、さりげなく、僕が傷つかないように。
そして僕もケンスケの複雑な生い立ちを知った。
ケンスケが妙に大人びている理由を知った。
ケンスケも、強い男だった。

アスカ……とは、学校では幼なじみという関係を通していた。その方がごちゃごちゃ言われなくて楽だったから。
学業優秀、容姿端麗、スタイル抜群、運動神経も飛び抜けている学園のマドンナ。性格は……すごく優しくなったかな。昔に比べたらの話だけど。
この三年間、ずっと気にかけていてくれたこと、今ごろ幸せに感じてる。感謝の気持ちで胸がいっぱいになる。
みんなに価値を認められているアスカがそばにいてくれたからこそ、僕は自分の価値にしがみつけたし、今もここにいることができるのかもしれない。
きっと、そうだ。
アスカには、昔っから迷惑ばかりかけてるね。
ごめん。
そして、ありがとう。

そういうわけで、
僕と綾波とアスカは、いつも一緒にいることができる。

僕はまた、みんなのお弁当をつくりはじめた。この年になって女の子の分までつくってるなんて、クラスのみんなは僕の変わりように唖然としていた。

綾波はまだ料理を覚えている最中だから当然として、アスカの分もどうしてもつくってあげたかった。トウジが茶化してくれてた昔みたいに、なにか特別な絆を感じていたかった。
最初アスカは、あたしの立場がないじゃないのって、顔を赤くして怒ってたけど、僕が綾波と二人で食べようとすると、必ず割り込んできて、結局今ではいつも三人で昼御飯を食べるようになった。
こんなこと、考えられる？
綾波と、アスカと、僕が三人でお弁当を広げているなんて。
おいしそうにお弁当を頬張ってるくせに、いつも味に文句をつけるアスカと、それをおかしそうに見ている綾波。
永遠に続けばいいと思える瞬間。
僕は魔法がとけないようにと願うシンデレラの心境だった。
男、だけどね。

二　放課後

シンジとレイは、いつもの喫茶店でいつもの窓際の席に陣取っていた。
毎日病院へ検診に行かなければならないレイに、こうやって近くの喫茶店で時間までつきあうのはシンジの日課だった。
お互い口数は少ないが、それが不安をもたらすことは、今の二人には考えられなかった。同じ時間、同じ場所に一緒にいるという事実だけで、満たされた気持ちになれた。

「あ……。今、私の飲んだでしょ」
シンジは、レイの言葉ではじめて、自分がしたことに気がついた。
「あっ！　ごめん。いつものつもりで……」
そう、シンジは看病をしている間、レイの残した飲み物や食べ物を、きちんと食べてあげていたのだ。厳しい主夫生活を送っていた時代の記憶がそうさせるのだろうか。
シンジは、レイが飲み残していたバナナ・オレを、無意識に飲み干してしまったのだった。
レイは目を伏せて、ほんのりと頬を赤く染めた。
最初は、レイが赤くなった理由に気がつかなかったシンジだが、ふと、ある単語が頭に浮かんでくる。
そう、これは、いわゆるひとつの『間接キス』
そのことに思い当たったシンジは、急激に血が頭に上ってくるのを感じた。思考能力が低下していき、錯乱状態に陥ってしまう。
「あっと、えっと、ほら、あの、別にこれくらい、いつものことだったし、ほら、その、お風呂だって入れてあげてたん……!!」
もはやシンジは、自分がなにを言っているのかわからなくなっていた。レイに対してしどろもどろに弁解をはじめる。
レイも自分の今までの立場を思い出して、一段と顔が赤くなるのを感じていた。
なぜ顔が赤くなって、動悸が激しくなるのか、レイ自身よくわかっていなかったが、シンジが動揺しているのを見ると、なんだか嬉しい気持ちが湧いてくるのを押さえきれなかった。
レイは、首筋から耳まで真っ赤にしながら、じぃぃぃっと、シンジの言い訳を聞き続けていた。

七月のある日。
夏休みはもうすぐだった。

三　幸せってなに？

そして今日も一日が終わった。
私は部屋の明かりを消して、ベッドに身体をすべりこませた。
そして暗闇に視線をさまよわせる。
昔に比べてあまりにも変化したこの生活。
なにかを見るたびに、誰かが話しかけてくるたびに、どこかに出かけるたびに、心が動く。
自分でも思いもよらない反応をしてしまう。
心を解き放つことが、こんなに楽しくて、嬉しくて、時には苦しいことだったなんて。

タオルケットを口元までずりあげる。
この布団、伊吹さんが選んでくれた。
あのカーテン、洞木さんが選んでくれた。
あの犬のぬいぐるみはアスカさんが。
机の上のサボテンは碇君が。
……このパジャマ、私が決めた。

ひとりだけど、ひとりじゃない。
この感じ、なに？

となりの部屋からテレビの音が漏れてくる。
アスカさん、まだ起きてる。
寂しくなったら、いつでも行ける。
そうしたら、たぶんアスカさんは、ミルクティーとお菓子を出してくれる。
いつも、そう。
そしてきっと、眠たくなってこの部屋に戻ろうとすると、『いつでも来ていいから』って声をかけてくれる。
だから、大丈夫。

ひとりだけど、ひとりじゃない。
この感じ、なに？

明日の朝、目が覚めて顔を洗いに洗面所に行くと、たぶん洞木さんがいる。
『おはよう』って、いつものように挨拶を交わす。
洞木さん、この前みたいなこと、また言ってくるかもしれない。
『アスカ、昨日も遅かったみたいね。まったく、うるさいったらないわ。レイちゃんも文句の一つくらい言ってもいいのよ』
そう言われても、私はどう答えるべきかわからなくて、きっとおろおろしてしまうだけ。
洞木さん、またくすくす笑いながら私を見るのかな。

ひとりだけど、ひとりじゃない。
この感じ、なに？

そして着替えて学校に出かけようとすると、いつもの交差点で碇君が待ってる。

私はなんだかドキドキして、じっと目を伏せるしかなくなる。髪型が変じゃないかとか。服にしわがついてないかとか。色んな事を気にしてしまう。

こんなこと、今まで一度も気にしたことなかったのに。

この感じ、なに？

あ……テレビの音が消えた

私も、もう寝なきゃ。

そして今日も、私は、絆に包まれて眠る。

今は、わかる気がする。

幸せってなにか、今はわかる気がする。

第七章　スクール・デイズⅡ

一　Children

（こんな日に週番なんてやってらんないわね）

朝早くからアスカはぼやいていた。
今日は一学期の終業式。明日から夏休みがはじまる待望の日だ。
いつもは始業ギリギリに教室に飛び込んでいるアスカなのだが、さすがに週番ともなるとなにかとやることがあるので、今日は少し早めに起きて学校に向かっていたのだった。
いつもよりひと気の少ない通学路を涼しげな朝の空気を感じながら歩いていると、いつの間にかぽつぽつと同じ学校の生徒の姿が目にはいるようになってきた。
そして、学校が見えてくる最後の角を曲がったとき、アスカはバッタリと二人の人影に遭遇した。

「あ、アスカ。おはよう」
「おはよう、アスカさん」
その二人はそろってアスカに朝の挨拶を投げかけてきた。
すっかり馴染んだ光景なのに、アスカの胸の奥は相変わらずしくっと痛む。二人の挨拶に応えてアスカの浮かべた笑顔はどこか硬い雰囲気を漂わせていた。
「おっはよ〜。朝から麗しい兄妹愛を見せつけてくれるじゃないの。お邪魔虫はお先に失礼するわね」
「ちょっ、待ってよ」
挨拶もそこそこに走り去ろうとするアスカの腕を、シンジが強く掴む。
「な、なによッ」
びっくりしたアスカは腕を振りほどこうとするが、シンジは放さなかった。
「学校そこだろ。一緒に行こうよ」
アスカの瞳を見つめながら、はっきりとした口調で言う。
もう振りほどけないほど強い力と心をシンジが持っていることに、アスカは驚きを覚えた。同時に、以前には微塵も見られなかった頼もしさを感じて少し嬉しくなったのも事実だった。
しかし、と、アスカは視線をレイに移す。
おそるおそる彼女の反応を伺うように瞳を動かした先には、笑顔があった。

彼女は見ていた。
じっとアスカを見つめていた。
シンジと同じ眼差しで。
まぶしいくらいの微笑みを浮かべて。

アスカは降参したかのように小さく息を吐いた。
「……わかった。わかったからもう離して」
いつのまにかアスカの白い腕にシンジが掴んだ跡が赤く残っていた。
「いった〜い。もぉシンジのバカ。レディーにはもう少し気を使ってよね」
「ご、ごめん」
「許してあげるからそんなに謝んないの。さ、行くわよ二人と

も」
　アスカの号令のもと、三人のチルドレンは並んで歩き始めた。レイを真ん中に、右にはシンジが、左にはアスカが。
　いつのまにか陽射しが強くなっていて、三人の影がアスファルトにはっきりと映る。
「そういえば、そろそろ県大会があるんじゃないの？」
　アスカがレイの向こうからひょこっと顔を出して、シンジに声をかけた。レイがちらりと、一瞬だけシンジの顔に視線を投げた。
「うん。八月に入ってすぐだったかな」
「今度はどう？」
「……たぶん。いけそうな気がする」
「へぇぇぇ、シンジにしちゃ頼もしい言葉じゃない。誰かさんの前だからかっこつけてるのかなあ」
「そ、そんなんじゃないよっ」
　慌てふためくシンジをよそにアスカはレイに声をかけた。
「とーぜんレイも応援に行くんでしょ」
　一瞬の間があった後、レイはちらりとシンジを見て、
「お兄ちゃんがいいって言うなら……」
　シンジの返事を待たずにアスカは言い放った。
「じゃ、決まり。あたしとレイがシンジの応援に行ってあげる。そーだ！　お弁当も二人で作ってあげるわね。レイもずいぶんお料理上手くなったんだから。ねっ？」
「そう……かしら」
「ま、あたしにはまだまだかなわないみたいだけど」
「え〜っ、アスカの料理って……」
「なによお。あたしの料理がどうだっつーのよ！」
「あは、は、いや、別に……なんでもない……」
　ドイツ風の味付けは好きじゃない、とはさすがに言えないシンジであった。
　今日は一学期の終業式。
　明日から夏休みが始まる待望の日。
　チルドレンが三人そろって登校した最初で最後の日だった。

二　Wired mind

　パタン。
　シンジは読みかけの雑誌を閉じてベッドの上に大の字に寝転がった。
　レイが退院してから二週間が経ったけれども、シンジはそれまで病院で費やしていた時間をいまだに持て余していた。最初のうちはＴＶを見たり音楽を聞いたりしていたが、次第にそれにも飽き、最近では部活を終えて家に戻っても、特になにをするでもなくぼーっとしていることが多い。
　今日も、そんな日だった。
　シンジは右腕を額の上に置いて目を閉じた。
　三年前の生活は……色々やることがあったよな。
　掃除に洗濯、炊事に買い出し。
　ひとりだけの生活って、こんなにつまらなかったっけ。
　その前に先生の所にいた頃もひとりだったけど、別にどうとも思わなかったはずなのに……。
　ミサトさん。アスカ。ペンペン。

大変だったけど、楽しかったな……。
ひとり……か。
そういえば、綾波はずっとひとりで生活してたんだっけ。
寂しくなかったのかな。
あのなんにもない部屋で寂しくなかったのかな。

ゴロリ。
シンジは、はじめてレイの部屋に入った時のことを思いだしながら、身体を横に向けた。
目の前に広がる自分の部屋。TVとコンポ、教科書とくだらない雑誌しか積まれていない本棚。はきつぶしたスパイクの墓場と、飾られるでもなく放置されている何枚かの表彰状。汗まみれのトレーニングウェアが、洗濯籠に放り投げてある。
そして部屋の隅には、あまり使われない電話が転がっていた。

……そういえば、綾波の電話もみんなで選んだんだ。
電話……電話番号……あのメモ、どこにやったんだっけ？

ガバッ。
シンジはベッドから飛び起きると、机の引き出しを次から次にかき回しはじめた。
だが目指すものは見あたらないらしく、しばらく部屋のあちこちに視線をさまよわせると、今度は床に放り投げてあるカバンに飛びついた。
そして一枚のノートの切れ端を取り出す。
それからしばらく部屋をうろうろしていたシンジだったが、電話の前を何度か行ったり来たりしたあと、思い切って受話器をとりあげた。

トゥルルル――
トゥルルル――
トゥルルル――

――カチャ

「もしもし。碇と申しますが……」
『あ……』
「もしもし？　綾波……だよね？」
『ごめん……なさい』
「どうしたの？」
『ん……なんでもない』
「そう……」
「あのさ」『あの』
「……」
『……』
「ごめん、特に用事があるっていう訳じゃないんだけど……。時間、大丈夫？」
『うん』
「……今日はすごく暑かったね」
『うん』
「夏休みの宿題がたくさん出たよね……」

それからしばらく学校の出来事などをぽつぽつと話していた二人だったが、お互いもとから話すことが得意ではないため、

次第に無言が続く時間が長くなってしまうのは仕方がないことだった。
　レイがぽつりと言った。

『……私と話してても退屈でしょ？　私、こういうときなにを話せばいいかわからないから……』
「そんなことないよっ！　ほら、綾波ってよく本読んでたから、その話とか、それから……それから……ごめん……」
『いいの。気にしないで。本当のことだもの。でもね、私、最近……』
「なに？」
『……笑わない？』
「うん。もちろん」
『書いてるの……詩』
「詩？」
『そう。詩を書いてるの』
「へぇぇぇぇぇ」
『……やっぱり。似合わないって思ってるでしょ』
「そ、そんなことないけどさ。なんか、不思議だなって思って」
『そう……かしら』
「あ、でも、昔っから、綾波って本をよく読んでたよね。教室とか、本部とかでも」
『うん』
「どんなの書くの？」
『……ダメ。言えない』
「どーしてさ？」
『だって恥ずかしいもの……』
「そう……ダメなんだ……」
『あ、でも、もう少し自信がついたら……その時は……見てくれる？』
「うん！」
『くす。そんなに大きな声ださなくても聞こえてるわ』
「あはは、そうだね。ごめん」

　照れ隠しのためか、二人はしばらく優しい笑い声をあげた。
　気がつくといつの間にか夜もすっかり深まっていた。

「あ、もう十一時過ぎてる……ごめん、そろそろ寝なきゃ。明日も県大会に向けて朝練があるんだ」
『そう……がんばってね。……今日は電話くれて……嬉しかった』
「そ、そう？　よかった。迷惑かなーなんて思ったんだけど」
『そんなこと、絶対に、ない……』
「うん……ありがと……また電話するね」
『……うん。待ってる』
「それじゃ……おやすみ」
『おやすみなさい……』
「……」
『……』
「綾波、切ってよ」
『碇君が先に……』
「……」
『……』
「じゃ、一緒に」
『うん……』
「おやすみ」『おやすみなさい』

ガチャン
ツー
ツー
ツー――

（碇くん……）

電話が切れてしまった後も、レイは受話器をぎゅっと握りしめたまま、その手を胸に抱いて身動き一つしなかった。
今まで知らなかった感情が胸に芽生えてきているのを、魅惑的な苦痛を伴うその感情を、今、綾波レイという少女は実感していた。

第八章　スクール・デイズⅢ

一　好敵手

容赦なく照りつける太陽。
ぬけるような青空。
バカみたいに大きな入道雲。
県大会の日は『真夏』のイメージそのものだった。
僕はゲートをくぐり、自分との戦いを始めるために、舞台へと足を踏み入れた。

――暑い。

周りを観客席で囲まれたこの陸上競技場の底辺は、まったく蒸すような暑さだった。むっとする熱気に、ただ立っているだけで汗がにじみ出してくる。
ハイジャンプのブースまで歩いて行くと、顔馴染みの選手たちの姿が目に入ってくる。
でも、無愛想な僕にいつも声をかけてくれるのはこの人たちだけ。
北高の桐丈さんと、陵高の泰治くんだ。

「よっ、碇。今日もクソ暑いな」
桐丈さんは全国大会の常連で、しかもファイナリスト（決勝出場者）を何度か経験している三年生。神奈川県のハイジャンプをやってる人間で知らない人はいないと思う。背が高くて髪を茶色に染めて長くのばしているから、いやでもすぐに覚えてしまうし。
ちょっと軽いところが好きじゃないけど、競技にはいると真剣そのもので、近寄りがたい雰囲気を漂わせる人だ。
「ところでさ、今日はいつものアスカちゃんと、もう一人すごく可愛い娘を連れて来たんだな」
桐丈さんがにやにやしながら視線を飛ばした方向へ、僕も目を向ける。割と近い観客席に、いつの間にかアスカと綾波が座っているのが目に入った。
ほんとに来てくれたんだ……。
口元が緩みそうになるのを慌てて抑えて、桐丈さんの方を見た。
「俺に紹介してくんない？」
やっぱり……アスカの時と同じセリフ。
「……僕の妹です」
わざと冷たい声で僕は答えた。
「妹？　……ってーと、俺はお前のことお義兄さんって呼ばないといけなくなるワケ？」
「そんなわけないでしょっ」
「冗談だよ、冗談。あいかわらず固いねぇ君は」
そう言うと桐丈さんは振り返って、
「な、泰治もそう思うだろ？」
声をかけられたもう一人の顔馴染みが、口元に笑みを浮かべながら近づいてきた。
「こんにちは」
僕と同い年で髪を短く刈っている泰治くんは、典型的な陸上選手といった感じだ。県大会ではいつもこの三人で表彰台を独占している。

僕は一度も一番高い台に登ったことはないけれど。
別に登りたいとも思わなかったけど。
今日は、違う。
しばらく雑談を交わした後、軽いアップを始めるために、僕は二人のそばを離れた。

残された二人の目が、黙々とアップを続けるシンジの姿を追う。
「今日はいつもと違うな」
「そうですね。目が違いますよ」
「本気を出されちゃ困るんだがな」
「そんなこと言いながら顔が笑ってません?」
「まーね。一度は本気でやってもらわないとすっきりしないってもんだ」
「参ったな……。せっかく桐丈さんがいなくなって全国にも行きやすくなると思ったのに」
「ばーか。そんな弱気じゃアスカちゃんに嫌われるぞ」
「あーっ、それは言わない約束だったじゃないですか!」

笑い声が空に響き、ハイジャンパーたちの戦いが始まった。

二　芝生の上で青い空を見上げる子供たち

午前中はいつもよりいい感じで競技を終えることができた。
桐丈さんはほとんどの試技をパスして、いつも通り最小限の力で上がってきている。泰治君と僕も一回目でクリアすることが多く、僕たち三人に選手が絞られてしまったところで、昼休憩の時間になった。
他の種目はまだ競技を続けているものもあって、お昼は各自でとるようになっていたので、僕は綾波とアスカと一緒に競技場を出た。
競技場のそばには立ち入り可能な芝生の広場がいくつもあって、これまでの大会でもよく食べていた場所に綾波とアスカを誘う。
「今日はなんだか安心して観られたわよ。でも、また、あの二人なのね」
アスカが歩きながらぐっと拳を握りしめる。
「桐丈のバカと泰治くん。たまには手加減してくれたらいいのに」
「そんなの僕は嬉しくないよ」
「ア・タ・シ、が悔しいの。また桐丈のバカにいろいろ言われちゃうんだから」
アスカもあの二人とずいぶん仲良くなったんだ。
そういえば、アスカが応援に来るのはこれで何度目だろう。
昔はいつもそばにいてくれたような気がする。
最近は……。
この前はキャプテンと一緒にお昼食べてたよな……。
別れたって噂……やっぱり本当なんだ。

なんだかほっとしている気持ちを味わっていると、綾波がじっと僕の顔を見つめているのに気がついて、慌てて僕は彼女に向かって口を開いた。

「あ、あのさ。ハイジャンプなんて、似合わないかな？」
　ちょっと訊いてみたかったことだった。
「ううん」
　綾波はちょっと首をかしげた後、
「お兄ちゃんが飛ぶ姿……とても、綺麗だった」
　すかさずアスカが突っ込みを入れてきた。
「そうなのよ。レイったら、シンジが飛んでる時って、ほけっと見とれてんのよねー。口なんか半分開いちゃってさ」
「やだ……。そう……なの？」
　綾波が慌てて口を押さえて顔を赤くするのを見て、アスカが再び茶々を入ながら笑い声をあげた。
　僕はなんだか嬉しくなる。口元がにやけてくるのを止められない。

　そんなことを話しているうちに僕たちは目的の広場へとたどりついた。風の良く通る木陰を見つけると、アスカがビニールシートを広げて、バスケットからいろんな形の入れ物を取り出しはじめる。
「これはレイでしょう。これは私。このタコさんはヒカリに手伝ってもらったの。そうそう。ヒカリが、今日は用事があって応援行けないけどよろしくって言ってたわよ」
「今度お礼言っとくよ。それよりさ、早く食べようよ」
「ふふん。おいしそうでしょ」
　そして、アスカが箸を配り終えるのを待ってみんなで合唱をする。
「いっただっきま～す」

　青い空に、吸い込まれていく、チルドレンの、声。

三　高く、空へ

　僕はスタート位置に立って天を仰いでいた。
　少しだけ傾きはじめた太陽が眩しい。
　二回前の試技で脱落した泰治君がテントの方から僕を見ている。グラウンドに立ちつくしている桐丈さんの厳しい視線が、僕の胃の下あたりをキリキリと締め上げる。
　さっきの試技で桐丈さんが飛べなかった高さが、今僕の前に在る。県大会記録を５cm上回るこの高さ。成功すれば全国大会のファイナリストに勝ったことになる。
　綾波とアスカは見てるかな……。
　観客席に目をやろうとした僕は頭を強く横に振る。
　余計なことはすべて頭から閉め出さないと。
　在るのは、僕と、越えるべきバー。
　それだけだ。

　そしてコンセントレーション。

　ハッ。

　ハッ、ハッ。

　呼吸に合わせて右手を握る。
　そして開く。

そしてまた握る。
早く。次第に早く。
早く。
早くッ。
『いける』
世界が一つになったようなこの感覚。
僕とバーとの距離がゼロになる。
足が、自分の力ではないなにかによって、そこしかない、そこでなければならない場所へ踏み出され。
身体が、腕が、目に見えない力によって導かれる。
僕は余計なことを考える必要がない。
ただ念じるだけだ。
高く。
高く。
風に、身を任せる。
そして気がつくと、僕はマットの上に横たわり、青空を見上げていた。
微かに揺れるバーが、僕を見下ろしている。
そして審判の白い旗が真上に揚がっているのが視界に入った。
僕はゆっくり立ち上がると、空に向かって右手を高く突き上げた。

四　痛み

県大会はその全競技を終え、僕たち陸上部は、夕暮れ時に学校に戻ってきた。着替えを済ませたり、ロッカーの後かたづけをしていると、いつの間にか部室には僕とキャプテンしかいなくなっていた。
キャプテンは今日の大会を最後に引退する。今日の１００ｍでは惜しくも全国への切符に届かなかったから。
これからは大学受験に本腰を入れるのだそうだ。自分勝手だった僕の面倒をよく見てくれたいい先輩だった。
帰宅する用意を済ませたキャプテンが、僕のそばにやってきた。
「とうとう桐丈に勝ったんだぜ？　もう少し嬉しそうな顔しろよ」
「嬉しそう……じゃないですか？」
僕は苦笑いをする。
「ま、お前らしいけどな。とにかく次は全国大会だ。うちの名を上げるためにも頑張ってくれよ」
キャプテンがぽんと僕の肩を叩いた。そして真剣な目つきで

僕を見つめると、一瞬間をおいて、
「最後に一つだけやっておきたいことがあるんだが、いいか？」
「はい。なんでしょう？」
キャプテンがなにを言いたいのかよくわからなかったけど、とりあえず僕は返事をした。
「一発で我慢してやる」
「え？」
キャプテンの右手が振り上げられたかと思うと、突然横っ面に衝撃が走って、それから、目の前が真っ暗になった。
僕はよろめいて、机に手をついた。口の中で血の味がした。キャプテンの抑制した声が耳鳴りと一緒に聞こえてきた。
「アスカの分だけで我慢しておいてやる。本当は俺の分も殴りたいところだが、それじゃあんまり惨めすぎるからな。彼女はずっと前から本気でお前のことを好きだったんだぜ。同情でもなんでもなく。お前、気づかないのか？　それとも気づきたくないのか？　お前たちの間になにがあるのか知らないが、きっとうまくやっていける二人だと思う。悔しいけどな。それじゃ、後は頼んだぜ、キャプテン」
そこまで一気に言うと、キャプテンは足早に部室を出ていった。
僕は殴られた衝撃から立ち直れないまま、キャプテンが口にした言葉を頭の中で繰り返していた。
アスカ……？
キャプテン……？
アスカが僕のことを？
僕が……キャプテン？
まだ頭の中は混乱していたけど、僕はよろめきながら自分のロッカーに向かった。キャプテンは手加減をしなかったみたいだ。
こんなに強く殴られたのは、トウジの時以来かな……。
不思議と怒りの感情はまったくと言っていいほど湧いてこなかった。むしろ心の中がすっきりとした感じがした。
アスカ……アスカ……か。
そうだよな……アスカにちゃんと言わなきゃ。
いつまでも逃げ続けるわけにはいかないんだから。
僕はロッカーの鏡に映った自分に向かって呟いた。

第九章　LOVE DIVER -A-

一　Gehen!

アスカ、いいこと？
これはデートじゃないんだからね。
あくまでシンジがお礼の気持ちでご馳走してくれるだけ。
そこんとこ勘違いしちゃダメよ。
絶対につらくなるから……。

県大会の日の夜にシンジからかかってきた電話は、アスカの期待を半分だけかなえてくれるものだった。
これまでお世話になってきた感謝の気持ちを込めて、おいしいレストランでご馳走をしたい。シンジの電話の内容をかいつまんで言うとそんなところだった。
アスカにも心当たりは山ほどあったので誘いを断る理由もなかったのだが、歯切れの悪いシンジの口振りが気になっていた。
（レイの生活のこと？　でもあたしが間にはいるまでもなく、シンジはいつも自分でちゃんと話してるみたいだし……）
（先輩と別れたこと？　ううん。シンジは知ってるみたいだった。そうでないと、こんな理由でも恋人のいる人間を誘ったりするようなヤツじゃない）
何回か堂々巡りを繰り返した後、アスカは考えるのをやめた。自分が考えても正確な答えが出るわけでもないし、いざとなったら直接聞いただせば済むことだから。
彼女らしい結論に達した後は、素直にその日を楽しみに待つことにした。

そして、約束の日がやってきた。
待ち合わせは十四時。アスカが起きたのは十時。昨夜はなかなか寝つけなかったうえ、基本的に低血圧でもあったので、起きるにはちょうど良い時間だった。
まずは朝一番のシャワーを浴びる。そしてTシャツにジョギパンといういつも通りの格好で簡単な食事。
一週間くらい前からヒカリは田舎に帰っていて寮にはいない。レイも病院で月例のドック検診を受けるため昨日から留守にしている。
レイが病院に行く日と今日が同じだったのはまったく偶然なのだが、アスカはどこか後ろめたい気分を感じずにはいられなかった。
もちろん事実はシンジからも自分からも話してあるし、レイも『楽しんできてね』と優しい声で言ってくれた。
それでも、やはり、自分がシンジと『二人だけ』でいられることを楽しみにしている感情が、レイに対する後ろめたさを感じる理由だとアスカは確信していた。
（ごめんねレイ。でも、シンジから誘われたの初めてだから、今回だけは大目に見て）
アスカは心の中でレイに謝ると、化粧台の前に座りこんで出かける支度をはじめだした。
化粧は全体的に薄いノリで統一。お気に入りのきつい色のルージュ――は、もちろんやめて、目立たない薄い色にする。
アクセサリーは銀色の細いネックレスに、小さいピアス程度で。マニキュアとペディキュアも健康そうな自然色。
ロングパンツにノースリーブの麻のジャケットと、シンジの

背の高さに合わせたこころもち高めのヒールを用意する。
アスカは大きい姿見の鏡に自分の姿を映しだすと、ひとり満足感にひたっていた。
（これならシンジも文句ないわよね）
茶色を基調とした落ち着いた装いは、確かに、とても高校生とは思えない大人びた美しさを醸し出していた。
（……って、招待されるあたしが、なんでこんなに気をつかわなきゃなんないのよっ）
「バッカみたい」
と、思わず口に出しながらも、最後にラベンダーの香りの香水をふりまいて仕上げをする。
時計はまだ十三時三〇分という時間を告げていたが、さっそくアスカは玄関へと向かった。
ドアを開ける前に大きく息を吸い込んで、ぐっと右手を握りしめる。
（ママ、行ってくるね）

二　誰かを待つということ

「うわあああああ、しまった！」
シンジの朝は絶叫と共に幕を開けた。
前日にトウジのアパートで夜遅く――正確には朝方まで酒の相手につきあわされたシンジは、朝九時頃にいったん目を覚ましたものの、ついつい二度寝をしてしまったのだ。
委員長がいない寂しさを僕で紛らわされても大迷惑なんだけど……とはもちろん口に出して言えなかった弱気のシンジ、慌てて机の上に目をやると時計の針はすでに一三時二八分を指していた。
「やばいっ！」
（自分から誘ったのに待たせるなんて……恐ろしすぎる……急げええっ）
シンジのアパートから待ち合わせ場所の駅までは、急いで走っても一〇分はかかる。念のため昨日から準備しておいたおろしたての服をひっつかむと、鏡で寝癖を直しながら、ダッシュで出かける準備をはじめるシンジであった。

その頃すでにアスカは待ち合わせの駅前でカツカツと靴を鳴らしていた。さっきから何回腕時計を見ていることだろう。
（だいたいなんであたしが先に来て待ってなきゃなんないのよ。先輩とのデートだっていつも待たせてたのに）
時間より早く来すぎた自分のことは棚に上げてアスカは怒っていた。
イラついたアスカは、はぎとるように腕時計をはずすと、ポケットに思いっきりつっこむ。が、自分でも気づかないうちに、今度は駅前の時計台の方に視線が何度も飛んでいく。
ゆっくりと時を刻む時計を憮然とした表情で見つめながら、アスカは誘われたときの電話を思い出していた。
食事だけじゃ感謝の気持ちが足りないからと、アスカは他にもどこかに連れていってもらう約束を強引に取りつけていたのだった。
必ず自分ひとりで選ぶようにと約束させたシンジが、ここ一週間ばかり頭を悩ませていたであろうことはアスカにも容易に想像できた。
（むりやり頼んで悪かったかしら……。シンジって面白いところ

知ってそうにないし、悪いコトしちゃったかな……）
　ぼんやりとそんなことを考えていたアスカの耳に、誰かが走って近づいてくる足音が聞こえてきた。
（……！）

　振り向いたアスカの目の前には、肩を大きく上下させて頭の上で両手を合わせているシンジがいた。
「アスカ、ごめん！」
　とりたててお洒落というわけではない服装だったが、日に灼けた肌とハイジャンプで鍛えた均整のとれた体つきは、なにを着ても似合うような気がする――と、アスカはさっきまで怒っていたことを忘れて感心したように小さくうなづいた。
　いつもはトレパン姿か学生服くらいしか見たことがなかったので新鮮な気分だったのもあるのだろう。
　ただ、慌てていたからかシャツの襟が少し曲がっていることにシンジは気づいていなかった。
「昨日トウジがしつこくてさ……」
　遅れてきたことを申し訳なさそうに謝るシンジ。その言い訳を聞きながら、アスカは、ちら、ちらと、シンジの首もとに目をやる。
「ん？　どうしたの？」
　シンジの言葉にはなにも答えず、無言でアスカがシンジの首のあたりに手を伸ばした。
「な、なに？」
　少しおびえ気味でシンジは後ずさろうとする。が、アスカが襟を直そうとしているのに気がつくと、突然顔を赤くして、おろおろと周囲にいる人たちを気にし始める。
「あ、ありがと」
「ったく、だらしないんだから」
　少しうつむき気味でアスカは言うと、くるり、と、改札口に身体を向けてシンジに呼びかけた。
「さ、行くわよ！」

三　ガラスの内側

　シンジがアスカを連れてきた場所は、ついこの間新設されたばかりの水族館だった。
　シンジたちの学校に一番近い駅の一つ隣の駅から歩いて一〇分。この水族館の目玉は、二人乗りの海底散策マシンが導入されていることだ。三六〇度全面耐圧ガラス張りのこのマシンは、手元のレバー操作で、ある程度自由に海底――と言っても本物ではないが――を移動ができるようになっていた。
　服を着たままでスキューバの感覚が少しだけ味わえるのと、その雰囲気づくりに適した状況がカップルには人気の的だった。もちろんシンジにそんな思惑はまったくなかったのだが。
「ご一緒でよろしいですね？　二人乗りだと少し狭いんですけど、カップルの方は喜ばれるんですよ」
「えっと……」
　入り口で受付嬢に尋ねられたシンジは、顔を赤くしながら助けを求めるように隣のアスカの方を見た。
「ええ。お願いします」
　アスカがにこにこと愛想良く笑顔を振りまきながら可愛らしい声で答えるのを聞いて、シンジはなぜか感心しながら、案内

された方の廊下へ向かって歩き始めた彼女の後を追った。
「今のカップルかわいかったね。特に男の子なんて顔赤くしちゃってさ」
「いいわよねー。私も若い子に乗り換えようかしら」
なんて声と笑い声が後ろから聞こえてきて、今度はアスカが恥ずかしさで顔を赤くする。
「ったく、もうちょっと堂々としてなさいよ」
「ごめん……」
「あー、もぉ。あいかわらず謝ってばっかりなんだから」
「ごめ……悪かったよ」
「同じでしょ！」
言いながら笑うアスカにつられて、シンジも少しだけ微笑んだ。

「へぇ、綺麗じゃない！」
マシンに入った瞬間、アスカは驚きの声をあげた。三六〇度張り巡らされている強化ガラスからは、ひんやりとした空気とともに、様々な種類の魚が泳いでいる様子が透明度の高い海水を通して視界に飛び込んでくる。
アスカはすぐにガラスにへばりつくようにして外を眺めはじめた。シンジはというと、アスカの言うがままにレバーを動かしてマシンを操作している。
しばらくすると、シンジがレバーを動かす手を休めて、ぽつりと口を開いた。
「アスカって海に潜るの好きだったよね。ほら覚えてる？　修学旅行に行けなかったあの時のこと」
外を眺めてばかりいたアスカは、思わずシンジの方を振り返った。
「う……ん」
アスカは驚いていた。自分さえ忘れていたことを彼が覚えていてくれたのだから。沈黙するアスカをよそにシンジは言葉を続けた。
「アスカが喜びそうなところって、これくらいしか思いつかなかったんだ。色々考えたんだけど、あんまりアスカのこと知らないんだ、僕は……。どうしてだろうね。もう四年近く一緒にいるのに」
シンジは壁面のガラスに歩み寄ると、少し寂しげな表情を浮かべた。
様々な想像を引き起こすその横顔をアスカは吸い込まれるように見つめている。
「ん？　なにかついてる？」
「……鼻」
長い沈黙の後アスカはそっぽを向きながら言った。
「はなぁ？」と言って、鼻の頭をこするシンジ。目を白黒させている。

アスカは外を見る振りをしてガラスに額を押しつけたまま、胸が締め付けられるように苦しくなるのを感じていた。
さっきの寂しげな表情が脳裏に焼き付いて離れなかった。
なんであんな寂しそうな顔をするの？
心臓が激しく脈打ちはじめた。
こんな狭い空間だとシンジにまで心臓の音が聞こえちゃうんじゃないかって、そんなバカなことを心配してしまうくらいに。
「あんな昔のこと覚えててくれたんだ……ありがと……」
アスカがようやく言葉を吐き出すことができた瞬間、制限時

間を知らせるブザーが鳴った。二人は再び陸に上がった。
　マシンから上がったシンジはまず時計を見て時間を確認すると、
「そろそろレストランに行こうか。少し離れたところにあるから、歩いて行けばちょうどいい頃だよ」
「うん……」
　水族館に入る前に比べてアスカの口数が少なくなっていることに、シンジはまだまったく気づいていなかった。

一　Warmth

『味は保証するよ』
　そうシンジが断言したお勧めのレストランは、シンジの舌なら安心だと思っていたアスカの予想をも上回るおいしさだった。見かけも中身も立派なレストランだっただけに、値段の方が心配になったアスカは割り勘にしようと提案したが、シンジはきっぱりと断った。
『アスカが喜んでくれたのなら、お金なんてどうでもいいよ』
　泣きたくなるようなセリフを吐いて。

　レストランを出た二人は夕暮れ時の歩道をぶらぶらと歩いていた。
　雲行きは少し怪しくなっていたのだが、さっさと家に戻るのはなんだか味気ないような気がして駅を一つ分歩くことにしたのだった。手入れの行き届いた歩道は人通りも少なく、もちろん見知った顔は誰一人として通らない。
　隣にいるのはシンジだけ。
　初めて感じるこの満たされた気持ち。
　アスカは今ならなんでも言えるような気がしていた。
「ねぇシンジ」
「なに？」
　――つらくなってもかまわない。
　心の中で何度もこの言葉を繰り返した後、アスカは決心した。
「あのね……」
「うん？」
　アスカが髪をかきあげながらシンジの顔を見た。
「あたしね。シンジとこんな風に歩きたいってずっと思ってたの」
　アスカのあまりにも自然な言い方にシンジは返す言葉を持たなかった。
「いつの頃からかは忘れちゃったけど……エヴァに乗らなくなってからってことだけは確かね」
　そう言うとアスカはころころと笑い声を上げた。
「あの頃のシンジはさえない男の子だったもんねー」
「そう……だったね」
　シンジも三年前の自分を思いだして苦笑いを浮かべた。
「今もそんなに変わってないと思うけど……」
「そうかも」
　またアスカがくすっと笑った。
「あたしが変わっちゃったのよ、きっと。なんだかおかしいのよね。無理しようと思わなくなってるの。昔だったら死んでもさっきみたいなこと言わなかったわ」
　アスカが上目遣いにシンジの顔をのぞき込む。
「でしょ？」
　シンジは無言でうなずいた。
「でも、あたしって嫌な女だから自分から言うのはしゃくだったの。シンジから言ってくれないかなって、ずっと待ってたんだと思う」
　アスカがこつーんと小石を蹴り飛ばした。
　その石の行方を目で追いながらシンジは訊ねた。
「なにを？」

「バカッ。そういう鈍感なところはあいかわらずなんだから」
アスカは囁くように言った。
シンジが好き。
まるで、そういう言い方だった。

びゅう、と、風が吹いた。
少し生暖かい風だ。雨がくるのかもしれない。
でも、今のシンジにはそんなことはまったく気にならなかった。
アスカが愛おしい。
こんなアスカを初めて見たような気がする。
もしかしたら今まで、わざとそんな風に見ようとしなかったのかも知れない。
僕なんかのそばにいてくれるのが不思議なくらいだったから。
この微妙な関係を壊してしまうのが怖かったから。
エヴァでしか繋がっていない絆なんだって、思い知らされるのが恐ろしかったから。
でも、今は、違う。
アスカはエヴァのパイロットではないし、僕もそうだ。
同じ学校に通う同級生なだけなんだ。
この三年間で忘れかけていた気持ちが鮮やかに戻ってきた。
今の気持ちに素直になろう。

シンジの右手が、そっとアスカの左手に触れた。
ぴくり、と、アスカは身じろぎをしたが、シンジが優しく手を握ってくるのを拒もうとはしなかった。
「な、なに、手なんか握ってんのよ」
照れ隠しにアスカはついつい語気を強めてしまう。

「迷惑?」
シンジはアスカの瞳を優しく見つめた。
「バ、バ、バ、バッカじゃないの。子供じゃあるまいし……。手なんかじゃなくて、腕くらい組みなさいよ」
そう言うなり、アスカはシンジの腕に自分の腕を絡めた。
そして、そっと身体を寄り添わせる。

いい匂いがする……。
シンジは知らないうちにすっかり女らしくなっているアスカに気づいて、おいてけぼりにされたような軽い衝撃を覚えた。
でも、なんで、アスカは僕なんかのことを……。
アスカを見れば見るほどシンジは不思議に思う。
頭が良くて美人で運動神経も抜群で性格も……最近は良くなって……。

シンジがじっと自分の顔を見つめているのに気がついて、アスカは頬を赤らめた。
「なによ。あたしの顔になにかついてるってーの?」
「ううん。あんまり綺麗だったから」
シンジはまさか自分の口からこんな言葉が出てくるとは思いもよらず、恥ずかしさで顔を真っ赤にしてしまった。アスカは……もう、言うまでもないだろう。
どこから見てもそれは恋人同士に見えた。本人たちがどう思っていようとも。
二人はお互いのぬくもりを感じながら幸せに思う。
肌と肌を合わせるとこんなに気持ちが落ちつくものなんだということを。今まで知らなかったこの安らぎを……。

二　Labyrinth

雨は唐突に降り出した。
ちょうど住宅街にさしかかったところで、近くに喫茶店のようなものもなく二人は仕方なく近くの公園で雨宿りをすることにしていた。
降り続ける雨をぼーっと見ていたアスカがぽつりと言い放った。
それはアスカが以前からどうしても聞きたかったことであり、シンジもいつかは答えを出さなければならない問いかけだった。
「レイのこと、どう思ってるの？」
その言葉を聞いた瞬間、シンジの頭の中を色々な光景がよぎっていった。もちろんアスカとレイの姿が。繰り返し、繰り返し。
アスカはシンジに背を向けたまま答えを待っている。
「……わからない」
シンジは自分の気持ちを正直に言った。
「エヴァに乗っていた頃は……どうだったんだろう。綾波のこと好きだったのかもしれない。でもそれはアスカに対しても同じ感情を持ってた。違ったのは、綾波がなんだか他人じゃないような感じがしていたこと。なにか秘密があったみたいなんだ。もう今となってはわからないけど」
シンジは遠く過去を見つめるような眼差しで言葉を続けた。
「でも、この三年間、僕が綾波のことだけを考えて生きてきた事実は変わらない。その間アスカのこと利用してただけだったのかもしれない。だってさ、アスカだよ？　アスカがそばにいてくれたんだよ？　どこかで甘えていたんだと思う。僕にはアスカがいるさって。だからアスカの事、僕は……『好き』だって言っちゃいけないんだ。そんなのって都合良すぎるよ。綾波のこともどう思っているのかわからないのに、そんなこと言えるわけない。いつになったらはっきり言えるのかも……今はわからない」
シンジはアスカの背中をじっと見つめながら言った。
「……ごめん」

アスカは悲しくなった。
シンジの正直さに、悲しくなった。
涙が、出てきた。
アスカはうつむいたままシンジの方を振り返った。
「嘘でもよかったのに……」
涙が、止まらない。
「嘘でも……いいの……」
アスカがぐいっと顔を上げた。
「ばか。ばかッ。シンジのおおばかッ！」
止められない想いが吹き出してくるのを、もう、アスカは抑えようとしなかった。
「嘘でもいいのッ。今だけで、この一瞬でいいから、あたしだけを見つめてよ……。その手で強く抱きしめて。お願いだから、あたしだけを見て！」

雨が横殴りに強く降り出した。
こんな風にアスカが感情をぶちまけるなんて、シンジは思ってもみなかった。アスカも自分の言葉に感情が高ぶるのを抑え

られないようだった。
涙を浮かべたアスカの瞳に耐えきれず、シンジは目を伏せた。
今の彼にとっては、アスカを抱きしめる衝動を抑えることが彼女に対する愛の深さを示す証であると思えたからだ。
それほどにシンジは不器用だった。
だからこそアスカも彼を好きになったのだ。
しかし今の彼女に、シンジの言葉をこれ以上聞き続けることはできなかった。

足音が遠ざかり、
アスカが駆け出して遠くに離れていくのを、
シンジは引き留めることができなかった。
手を掴むことができなかった。

シンジはいつの間にかずぶぬれだった。
ズボンが汚れるのもかまわずに、シンジは地面に腰をおろして雨に打たれた。雨に濡れた髪がべっとりと顔に張りついて気持ちが悪い。
呆然とそんなことを考えていると、
……逃げちゃダメだ。
と、あの声がまた聞こえたような気がした。

三　2nd KISS

ずぶぬれになって寮に戻ったアスカは、不思議と心の中が澄み切っているような感覚を味わっていた。今までずっと溜め込んできた感情をぶちまけたことがそう感じさせるのだろうか。
シンジの返答は予想できたことだった。
シンジらしかった。だからこそシンジのことを好きになった。
暖かいミルクティーを飲みながら、アスカは昔のことを思い出していた。あれだけ嫌いだったシンジをなぜこんなにも好きになってしまったのか。

どうして？
どうしてこんなに好きになってしまったんだろう……。

最初の一年はあいつのこと昔みたいにバカにしてた。
レイに尽くすことによって罪の意識から逃れようとしてるだけだって。そんな風にしか思えなかった。
まだ、あたしが、人を見下すことでしか自分の存在を確かめられなかった頃の話。
シンジが諦めたときに笑ってやるんだ、なんて酷いことを思ってた。

あたしの中でなにかが変わってきたのは二年目。
平和で落ち着いた生活にすっかり馴染んできたあたしは、自分の価値と自分の居場所を少しばかり掴みはじめてた。
歪んでいた自分の感情と冷静に向き合うことができるようになったのもこの頃の話。素晴らしい友人たちのおかげだった。
毎日毎日、学校と病院と自宅を行き来するだけの生活を送っているシンジを横目で見ながら、あたしは学校生活を楽しんでいた。
けれど、シンジに話しかけても暗い顔と暗い言葉しか返ってこないことを、どこか寂しく感じてた。

三年目には、気がつくとあたしの目はいつもあいつばかりを追うようになってた。
自虐的なまでにレイへ尽くすその姿を見て、相手が彼女でなくても同じ事をするのかなって、ときどき彼女とあたしを置き換えて想像したりもした。
たぶん、最初は同情だったんだと思う。
いまだにエヴァの後遺症に囚われているシンジに同情を感じてた。
そして同情が敬意に。敬意が愛情に変わるのは、そんなに時間を必要としなかった。
見返りはない。報われるかどうかもわからない。そんな行為を三年間も続けているシンジをあたしはバカだと思った。そんなシンジなら信じることができると思った。裏切られないと思った。好きだと思った。
もしかしたらあたしはあいつのことを昔から好きだったのかもしれない。そんなことさえ思うようになっていた。
そして自分がただの女になったと思ったとき、なにかから解放された気がした。
シンジは、あたしを解放してくれた。
そう小さく呟いたアスカの耳に、誰かが玄関先に来ていることを知らせるチャイムの音が届いた。
シンジはアスカの寮の入り口に立っていた。目の前にはオートロックのドアが立ちふさがっている。
シンジはインターホンで何度もアスカを呼び出した。五回目のコールで人影のようなものが磨りガラスのドア越しに見えた。
その人影はぴたっとドアの向こう側で立ち止まったが、ドアを開ける気配はない。シンジはドアの向こうにいる人物がアスカだと確信して話しはじめた。
「アスカの言いたいことはわかる……と思う。でも、さっきも言ったように、今の僕にはできない。ただ優しさに甘えてるだけじゃ、昔の僕と変わらないんだ。でもアスカのことを大切に思っていることだけは信じて欲しい。都合がいい男だって思われてもいい。嫌われてもいい。アスカのこと、綾波のこと、同じくらい好きだ。でも、今は綾波のそばにいなきゃいけない。でないと綾波は絶対にどこか遠いところへいってしまう。そんな気がするんだ。許してなんて言わないよ。でも、僕は、まだ、綾波のそばにいるから」
シンジは自分の言葉で訥々と想いを語った。ドアは開く気配を見せなかったが、シンジが話し終えてしばらくたつと、アスカの声がガラス越しに聞こえてきた。
「わかった。今は、シンジのこと信じる。信じるから……信じるから……いつか、あたしのことを幸せにして。約束して。絶対に裏切らないって」
シンジがアスカの声に答えて真剣な表情でうなづきかけたそのとき、いきなりドアが開いてアスカが飛び出してきた。
「痛っ！」
ドアに額と鼻をしたたかに打ちつけて苦しんでいるシンジに、アスカは容赦なく抱きついてきた。
「うふふ……あたしのことしおらしい女だって思った？　そんなに甘くはないわよ、ばかシンジ」

雨に濡れたアスカの顔が近づいてきて、そして驚くシンジの視界を完全に塞いでしまった。

アスカとの二度目のキスは雨の味がした。

――なんて言ったら、アスカに殺されちゃうかな。

土砂降りになった雨の中、シンジは優しくアスカを抱きしめていた。

P.S.

ママ、あたしは今日デートをしました。
先輩じゃありません。彼とは別れましたから。
今日の相手は、あのバカです。
あのバカ、突然変な理由で私に誘いの電話を入れてきました。
もちろん断る理由なんて、見つけることができませんでした。
本当のこというと、見つけようとしなかったんです。
とにかく今日は色々あって、日記には書ききれません。
ただ、あたしは自分の気持ちを正直に言うことができました。
あのバカは……わかんないけど、いいんです。
あたしは自分の気持ちを全部言えたから。
そして雨の中、二度目のキスをしました。
三度目は、絶対、あのバカからキスさせようと思います。
その時はまた報告しますね。
それじゃ、ママ。
おやすみなさい。

第十一章　起きなかった奇跡

一　それは夕立の降るが如く

第二新東京市。世界再建委員会ビル。最上階議長室。
白髪の男が端末のディスプレイに向かっていた。
「し、しかし、これはあまりに……。第四次再建計画に支障をきたしかねません。外部に漏れると、進退問題に繋がる恐れも……」
「かまわん。私がすべての責任をとる。指示通り、MAGI-Sの稼働率を30％ダウンし、伊吹博士にフリーアクセスの権限を与えろ」
「……了解しました」
冬月は回線を閉じ、深々とソファーに身を沈め、目を閉じた。
「奇跡は、起きなかったか……」

同月同日同時刻。第三新東京市。中央総合病院へリポート。
「ほんとに……いいの？」
「……はい」
伊吹は久しぶりに、あの頃の抑揚のない少女の声を聞いたような気がした。三年前に時間が舞い戻ったような感覚に襲われる。
だがたった一つの違い、それが『時』を物語っていた。
少女の紅い瞳に浮かぶ、伊吹が一度も見たことのなかった涙。拭っても拭っても溢れてくる涙。それが少女のすべてを表していた。
「伊吹博士、そろそろ出ます」
ヘッドギアから助手の声がノイズと共に聞こえてきた。
バラバラと空気を切り裂く音とともに、病院のヘリポートがしだいに小さくなっていく。第三新東京市が、遠くに消えていく。
少女の紅い瞳は、天井の一点を見つめたままじっと動かない。一筋の涙だけが、少女が生きていることを証明しているように見えた。
伊吹はそっと少女の手を握りしめる。だが、握り返してくる力は感じられず、行き場のない悲しみと悔しさで、全身が脱力感におそわれる。

先輩、どうすればいいんですか？
私にはなにもできないんですか？

……科学ってなんですか？

二　予感

「ちょっと！　あんたたちなにしてんのッ!!」
見知らぬ男たちがレイの部屋の鍵を開けようとしているのを見て、アスカは叫び声を上げた。
あの日から三日がたち、病院から元気に帰ってくるはずのレイの代わりに寮にやってきたのは、どこかで見たことがあるような黒服の男と、お揃いの作業服を着た数人の運送屋だった。黒服の男は寮母とひとこと、ふたこと話した後、胸の内ポケッ

トからなにかのカードを見せて、マスターキーを奪い取った。
レイの部屋が開けられ、すべてが段ボールに詰め込まれた。
黒服の男は暴れるアスカを羽交い締めにして、作業を無事に終了させた。

アスカは彼らのやり方を知っていた。わずかな時間も無駄にするつもりはなかった。自分の直感を信じて部屋に駆け戻り、一番大きいバッグを押入れから取りだすと着替えを詰めこんだ。
そして、駅へ向かって駆けだした。
アスカが飛び乗ったリニアは、第二新東京市行きの最終列車だった。人影もまばらな指定席に身を沈みこませると、アスカは真っ暗闇の窓の外に目をやった。しばらく窓に映る自分の瞳を見つめ続ける。
列車が地下に潜りはじめると、アスカは思いだしたようにバッグの中から携帯端末を取りだした。スイッチを入れて、電子メールのモードに切り替える。
まずヒカリに、詳しい事情を伏せて、後の事を頼むとメールを送ると、次はシンジ宛にメールを書きはじめた。

シンジ、あんたはそこにいて。動いちゃダメ。
なにかわかったら必ず連絡するから。
絶対にじっとしてて。
お願い、私を信じて。

送信ボタンを押すと、今度は電話のモードを受信拒否に切り替えた。シンジの声に耐えられる自信が、今のアスカにはなかったから。
ひととおり事を終えると、大きく息を吐いてアスカは身体の力を抜いた。だが、身体を動かすのをやめた瞬間、得体の知れない絶望が心に忍び寄ってくるのを感じた。震えが、止まらなかった。

三　TOKYO-2

列車が第二新東京市に到着したのは夜の十二時をまわっていた。気ばかり焦って何度も足をもつれさせながらも、アスカは以前に二、三回遊びに来たことがある伊吹のマンションにたどりついた。
玄関のチャイムを鳴らす。
二回、三回。
不機嫌そうな声がインターホンから聞こえてきた。
「はいはい。どちらさんですか？」
「青葉さん？　アスカです。惣流・アスカ・ラングレーです」
「アスカちゃん!?　なんでこんな……ちょ、ちょっと待ってて、今開けるから」
電子ロックが解除される微かな音がして、滑るようにドアが開いた。帽子を目深にかぶった青葉がアスカを部屋の中に招き入れた。
「いったいどうしたの？　こんな時間に……っつーかこんなとこまで？」
アスカの真剣な表情に青葉もただごとではないと察したようだ。
「なにも聞いてません？」
「マヤ……から？」

「はい」
「んー……いや、別に。今日からしばらく帰りが遅くなるって電話はあったけど」
　アスカは確信した。
「それね」
「は？」
「マヤは再建委員会のビル？」
「あ、ああ、そうだと思うけど」
「でも、入れるわけないか……」
　アスカは眉間にしわを寄せてぶつぶつと呟きはじめた。
「なにかあったの？」
　青葉が上着を着込みながら言った。
「……青葉さんも協力して」
　アスカの有無を言わさぬ迫力に、思わず青葉はうなづいた。
「レイがいなくなったの」
「レイちゃんが？『第三』の病院から？」
「うん。きっとマヤんとこにいるはず。今日委員会の黒服が寮に来て、レイの荷物を全部持っていったの。レイになにかがあったんだわ、きっと……」
　青葉は嫌な予感がした。
「わかった。ちょっと待ってろ。いま車を出してくる」

　それから一〇分も経たないうちに、二人は目的のビルの入り口に立っていた。押し問答の末、青葉が伊吹に連絡を取ることでようやく入館を許可された二人は、指示通り地下六階の特別集中治療室に向かった。通常、一般人は決して入ることのできないセキュリティーランクSのブロックだ。VIPクラスの患者しか対応しない。

　警備員に案内された部屋は、なんの飾り気もない待合室だった。二人が到着したと同時に白衣姿の伊吹が向かいのドアから姿を見せた。
「マヤ！　レイはここにいるんでしょ！」
　開口一番、アスカは伊吹に詰め寄った。視線を逸らしながら伊吹は答える。
「……ええ。そうよ」
「なんで！　どうして！　レイになにがあったの!?」
　伊吹は助けを求めるような視線を青葉に投げかけた。青葉は嫌な予感が的中したことを確信した。伊吹の代わりにアスカに向かって話しはじめた。
「……彼女は普通の生活に耐えられる身体ではなかったんだ。ずっと……生まれたときから……」
「……！」
　アスカは振り返って青葉を見た。
「昔、彼女が定期的に本部に通っていたのは知ってるだろ？　あれは身体のメンテナンスが必要だったからなんだ。特殊な溶液に浸すことによって身体の劣化を防ぐために。だがそのシステムの根幹をなす秘密は、あの本部崩壊の時に赤木博士と碇司令の死によって失われた……」
　青葉は淡々と説明を続けた。ネルフの深層部にタッチしていた一人としての義務感がそうさせるのか。
「……眠り続けていた三年間は、まさに奇跡が続いていたような状態だった。外界からの刺激が少なく、精神状態も安定していたからかもしれない。だがレイちゃんは、目を覚ましてしまった……」
　伊吹が後を続けた。
「私たちも全力を挙げて身体の変化がないか観察を続けていた

わ。最初の二、三週間はなにも問題がなかったの。けれども、今日、突然……」
伊吹が目を伏せて頭を横に振った。

アスカは沈黙するしかなかった。なにも言えず、立ちつくすしかなかった。
青葉は呆然としているアスカを椅子に座らせると伊吹に向き直った。
「ところでシンジ君にはもう伝えたのか？」
伊吹が目を伏せたまま答える。
「いいえ。まだなにも言ってないわ……。向こうからは何度も連絡はあったようだけど」
「どうして！」
語気を強める青葉。
「だって、だって……言えないわよ！　あんなに頑張ったシンジ君に言えるわけないじゃない！」
さらに青葉が伊吹に詰め寄る。
「それを決めるのはおまえじゃないだろ！　シンジ君が解決すべき問題じゃないのか？」
伊吹は涙を目に浮かべながらも、キッと青葉の目を見据えた。
「レイちゃんの気持ちがわからないの？」
手で顔を覆って嗚咽をあげ始める伊吹。
（くそっ、神様はどこまで残酷なんだ……）
青葉は神を呪いながら、伊吹の肩をそっと抱いた。

二人のやりとりを爪を噛みながらじっと聞いていたアスカが、自分の携帯端末を取り出した。メール確認のアイコンを押すと、ざっとメールに目を通しはじめる。

未読メールは二十三通。二通はヒカリから。残りはすべて、シンジからだった。

§　§　§

差出人　碇シンジ(JAF03757@west.tokyo3.high.ac.jp)
日時　2018/8/16　0:12
タイトル　どこにいるの？

アスカ、なにがあったの？
今どこにいるの？
綾波はどこに行ったの？
電話する。

§　§　§

差出人　碇シンジ(JAF03757@west.tokyo3.high.ac.jp)
日時　2018/8/16　3:49
タイトル　なし

電話にでてよ。
どうしてでてくれないの？
どこにいるの？
どこにいるの？

二人ともどこにいってしまったの？

§　§　§

差出人　碇シンジ(JAF03757@west.tokyo3.high.ac.jp)
日時　2018/8/16　5:03
タイトル　待ってる

どうしてなにも教えてくれないの？
僕は知らなくていいことなの？
そんなことないよね。
信じて待ってればいいんだよね。
でも……
早く……お願いだから……

第十二章　世界に一つしかないもの

一　痛がる心

綾波レイは、完全に隔離されていた。
温度も湿度も空気の流れさえも、すべてが一定に保たれた無菌室。そこに『生』は感じられない。頑丈なガラスで仕切られた隣の監視室では、彼女のすべてがモニターされている。

レイが身体の不調に気づいたのは、シンジが県大会で優勝した日の夜だった。全身に微かな痺れが走り、思うように身体に力が入らなくなった。
間近に迫っていた診察の日に言い様のない恐怖感を感じて、レイは一人部屋で震えていた。
シンジが勧めてくれた電話機が、彼女の心を吸い寄せて、ただ声が聞きたくて、レイは生まれて初めて自分から彼に電話をかけた。体中から勇気を絞りだして受話器を上げた。
だが、返ってきた答えは、機械的な話中音だった。
二度目を鳴らす勇気が、レイには無かった。
涙が受話器にこぼれ落ちた。

そして彼女は、誰にもなにも告げないまま、今ここに横たわっている。まだはっきりとした言葉を聞いたわけではないが、周りの様子から自分の身体がどんな状態にあるのかは推測できる。
予想していなかったと言えば嘘になる。三年前の記憶はそのまま残っていたのだから。

創られた身体。創られた心。
人になれた心。人になれなかった身体。
一番欲しかったものは手に入れられたけど、今はそれを保つために、嫌悪していたあのたくさんの身体が欲しい。
消えてしまいたかった昔の私。
死にたくない今の私。
目覚めなければよかった。
あのまま夢の中に消えてしまえばよかった。
どうして私は目覚めたの？
なんのために目覚めたの？
もう一人の自分がもぞりと蠢きだした。

――私は碇君になにも言えないまま消えてしまったわ。
……でも、あなたは碇君のために死ねた。
私はなんのために死ぬの？
碇君のためじゃない。
ただ、死ぬしかないの。
その時を、ただ、待っているしかないの。

――あなたは碇君と一瞬でも気持ちが通じ合えたわ。
その一瞬の幸せが、今の私にはつらいの。
どうしようもないくらいつらいの。
夜も眠れないくらい怖いの。

このまま眠ったら、もう二度と碇君の顔を思い浮かべることができなくなるんじゃないかって。

――私にはつらいと思うことさえできなかったわ。

……そんなの……そんなの……知らない！

私に言われてもわからない！

こんなに悲しくて、寂しくて、つらくて……。

こんな気持ち今まで知らなかった……。

――心が、痛いでしょう？　胸が張り裂けそうでしょう？

それが人になった証。あなたは望み通り人になれたの。

それなのに嬉しくないの？

嬉しくない！

――嬉しくないの？

嬉しくなんかない！

――嬉しくないの？

こんなの、こんなの、嬉しくないッ！

――人になると、心が痛いでしょう？

痛い！　いたい！　イタイッ！

カチャリ。

隣の部屋のドアが開く音がスピーカーを通して聞こえてきて、果てしなく続く思考の渦を断ち切った。

レイの視界の隅に、隣のモニター室に入ってくる冬月の姿が映った。

二　老人の罰

綾波レイの身体に異常が判明した日から、MAGI-Sはその30％の能力を使用して、ダミーシステムの根幹をなすシステムの解析に当たった。

だが以前から続けられていた研究の結果に付け加えられるような成果は上げられそうになかった。ダミーシステムに関する可能な限りの調査は、すでにこの時までに終了していたのだから。

徹夜明けの冬月に報告が入った。お決まりの挨拶を省かせ冬月は問う。

「それで解析結果は？」

「現在40％程度までは分析できたのですが、それ以上はやはり物理的な損壊が激しく不可能との回答が。現状ではシステムを組み直せる可能性は皆無だと思われます」

「……そうか……やはり無理か」

(MAGI-Sを使ってもダミーシステムの秘密は紐解けぬか。あの爆発さえなければ、いや、せめて碇か赤木君が生きておれば

……）
　冬月は頭をふった。
（あのようなものが存在した事実こそが抹消されねばならぬ）
「伊吹博士はいるか？」
「はい」
　しばらくして憔悴しきった伊吹の顔がディスプレイに現れた。
「ご苦労だった。ところで彼女には事実を伝えたのかね？」
「……いえ。まだはっきりとは」
「私が行こう」
「議長、なにも自ら……」
「いや、これは私の仕事だ。私に伝えさせてくれ」
「……はい。今からデータを送ります」
「頼む」
　転送されてきたデータを無表情に眺めると、冬月は重い足取りで部屋を出た。地下六階の集中治療室へと向かいながら、セカンドチルドレンがここに来ているという報告がふと頭をよぎる。
（彼女らしい行動力だな。……しかし、彼は？　果たしてこの事実を受け入れることができるのか？　三年間の奉仕の代償がこのような形で結末を迎えるとは、あまりにも過酷な運命ではないか……）
　五分後、冬月はレイが収容されている集中治療室に到着した。
　人払いをした後、彼はマイクの前に歩み寄った。ガラス越しに直接レイの顔を確認することはできないが、モニターには懐かしささえ覚えるあの無表情な顔がある。
　軽く咳払いをして冬月は口を開いた。
「レイ君、久しぶりだ」
「お久しぶりです、副司令」
「副司令はよしてくれ。冬月でいい」
「はい」
　冬月は話をどう切り出すべきか悩んだ。
「……」
「私はやっぱり死ぬんですか？」
　直接的なレイの言い方に冬月は僅かに言葉を詰まらせた。
「……すまない。私たちの力では君を助けることはできない」
「いいんです。わかっていましたから」
　レイの言葉にまったく感情が感じられないことに冬月は驚いた。
　まるであの頃と同じように。
　自らの死に直面してもまったく動じないその姿に、冬月は感動さえ覚えた。
　レイが無表情に問う。
「あとどれくらい生きられますか？」
「もって一〇日というところだ」
「わかりました」
「……すまんな」
「はい」
　レイからそれ以上の言葉はなく、冬月はマイクを切った。
　部屋を去る寸前、冬月はちらりとガラス越しにレイの姿を確認した。彼女は身体を折り曲げて、嗚咽を上げて泣いているように見えた。
　かつて道具として扱った少女の身体を震わせる姿から、冬月はしばらく視線をはずせなかった。
　そして冬月は自分の頬を何十年ぶりかに伝う温かいものに驚

いた。
「……私にも、まだ人の心が残っていたのか」
老人は自嘲し、そして、涙を拭わぬまま扉を閉めた。

三　ヒトの叫び

「アスカちゃんが来てるんだけど……」
伊吹がスピーカー越しにレイに問いかけたのは、冬月が去って一時間ほど経ってのことだった。
「アスカさんが……どうして……」
「レイちゃんのことが心配で飛んできてくれたの。会える？　大丈夫？」
どうしてアスカがこのことを知ったのかはあえて聞かず、レイは答えた。
「……はい。謝ることがありますから」
伊吹が廊下へ通じるドアを開くと、アスカが青葉とともに部屋の中へ入ってきた。泣き疲れて眠ったためか、アスカは目を赤く腫らしている。
しかし、すぐにレイを取り巻く環境に気づいてその目を大きく見開かせた。ついこの間まで、一緒にご飯を食べ、お風呂に入り、同じ布団で眠りさえもした彼女なのに、今は分厚いガラスに阻まれて直接顔を見ることさえままならない。
アスカは両手をぎゅっと握りしめてマイクのある端末へ足を踏み出した。
伊吹は後を青葉にまかせて退室する。残された青葉は壁に背をもたれて目を閉じた。

アスカがモニターとマイクの前に立ち、スイッチを入れた。口をしっかりと結び、絶対に泣かないと心に決めて。
しばらくの沈黙の後、先に口を開いたのはレイだった。
「ごめんなさい……。なにも相談せずにいなくなったこと、怒ってる？　でも、これ以上優しくされたら、私、ダメになっちゃう気がしたから。今ならまだ諦められる。そんな気がして……。ごめんなさい」
「バカ……」
アスカはレイがなにも言わずに消えてしまったことは気にしていなかった。いずれにしろ、こうなるしかなかったことなのだから。
ただ、レイがシンジになにも連絡をしようとしないことだけが、気にかかっていた。
「シンジがあんたのこと好きだって言ってたわ……」
アスカの言葉にレイの瞳が動揺する。
「あんたもシンジのことが好きなんでしょ？　会わなくていいの？　好きだって言わなくていいの？」
レイはモニターの向こう側で寂しく微笑んだ。
「私は、いいの……。三年間、そう三年間も、私はなにも答えてあげられなかった。碇君の時間を私は無駄に使わせてしまったわ。どんな顔をして会えばいいのかわからない。なんて言えばいいかわからない。そんな都合のいいことできるわけない。私にそんな資格なんてない……。このまま誰にも知られずに消えていくのが一番良いと思うの」

バンッ！
アスカが端末に拳を打ち付ける音が部屋に響きわたった。

なにが起こったのかと、青葉が一瞬だけ目を開けた。
アスカがレイを怒鳴りつける。
「じゃあ、そのままシンジの前から消えてちょうだい！　二度とその姿をあいつの前に見せないで！」
「アスカさん……？」
「うぬぼれないでよね、レイ！　あんたなんかにシンジのなにがわかるってのよ。ただ寝ていただけのくせに、わかったような口聞いてくれちゃって……。シンジがどんな気持ちで三年間もあなたのそばについていたと思うの？　誰のために……あいつは……」
アスカは一瞬声を詰まらせたが、再びレイの瞳をにらみつける。
「あんたはそれでホントに納得できるの!?　シンジと離れるのがつらいんでしょう？　もっと泣き叫びなさいよ！　わめいて、のたうちまわって……。この世界に……しがみつきなさいよっ」
アスカの頬を涙が伝う。
「そんなの、まるで昔のあたしみたいじゃない……」
アスカの涙が、レイの感情を高ぶらせた。
「私だって……私だって……泣き叫びたい！　でも、そんなことしてなんになるというの？　死が遠のいていくわけ？　そんなことない……なにをやっても、もう無駄なの……」
アスカは力一杯頭を左右に振った。
「ちがう、ちがう、ちがうッ！　それがどうしたっていうのよ！　あんたは理屈で生きてるの？　それは昔のあなたでしょ。今は心で生きてる。そうじゃないの？　だから泣きたいときには泣いて、わめきたいときにはわめく。好きな人がいればその人に会いたいって言いなさいよッ！　それが生きてるってことじゃない！　あなた、それじゃ、まだ人形と同じだわ！」
「……もういい」
二人のやりとりに耐えきれず、青葉がアスカを制した。
青葉に両肩を掴まれたアスカが、最後に優しく言った。
「シンジの事が、大好きなんでしょう？」
だがレイからの返事はなく、アスカはうつむいて涙をぽたぽたとモニターにこぼすと、力ない足取りで立ち去ろうとした。
「……たい……あいたい……私、碇君に逢いたい！」
レイの声が聞こえた。分厚いガラスが震えたような気がした。
振り向いたアスカの瞳と、ガラスの向こうで身体を起こしたレイの瞳が絡み合った。
アスカは力強くうなづくと、走りだした。
「すぐにあのバカ連れてくるから！　それまで絶対に待ってなさいよ！」

第十三章　生まれてきた理由

一　震える子供たち

アスカが第三新東京市に戻ったのは、ギラついた光線を投げかける太陽が高々と空に昇る頃だった。
いつものアスカならば、その乱れた髪、腫れぼったい瞼のまま街中を歩くようなことは絶対にしないであろうが、今はわき目もふらず街中を小走りに駆けていく。
いったいシンジにどう説明するのか、なんと言えばいいのか。自分の気持ちの整理さえついていないのに、とアスカは思う。
とにかく一刻も早くシンジをレイのもとへ連れていくこと。今はそれだけしか考えられなかった。

シンジの部屋を訪れるのは久しぶりだったが、一度も道を間違えることなくアスカはたどりつくことができた。
そっとノブに手を触れてみる。
鍵はかかっておらず、抵抗なくドアは開いた。
暗く、そして寒い。
カーテンが閉めきられているからか、外の明るさに慣れていたアスカの目には、部屋中が真っ暗に見えた。クーラーも強烈に効いている。
アスカはブルッと身を震わせると、暗闇の中に足を踏み入れた。
後ろ手にドアを閉めて靴を脱ぎかけた時、
「……アスカ？」

奥の部屋から、か細い声が聞こえてきた。紛れもなくシンジの声だった。アスカは導かれるように奥の部屋へと足を進めた。
シンジとおぼしき人影がベッドの上で膝を抱えて壁にもたれていた。
「……アスカ……なの？」
その人影がゆっくりと顔を上げた。ようやく暗がりに目が慣れてきたとはいえ、アスカにはその表情はまだぼんやりとしか見えなかった。
シンジの弱々しい声に胸が締めつけられ、アスカは容易に口を開くことができなかった。
「……う……ん」
「綾波はどこにいるの？」
「……」
「なんでいなくなったの？　どうしてひとことも言ってくれなかったの？　アスカはどこに行ってたの？　なにをしてたの？」
「……」
「綾波はどうなったの？」
アスカは大きく息を吸って、カーテン越しの薄明かりに照らされてようやくはっきりと見えるようになってきたシンジの顔を見つめた。
シンジの顔には、昨日からなにも食べず、一睡もせず苦しみ続けた疲労が表れていた。
「……レイは病状が悪化して第二新東京市の病院に移されたわ。回復する可能性はゼロに近いの。あんたも早く会いに行くのよ」
「……病気？　なに言ってるのさ？　綾波はあんなに元気だったじゃない」
そう言うとシンジは乾いた笑い声を上げた。
「レイはもうすぐ死ぬの」

アスカは冷酷にもとれる口調で言い放った。
シンジに彼女のことを告げる――その重荷を背負うことでアスカはレイへの負い目をはらそうとしたのかもしれない。
彼女のことをなにも知らなかったのに、ただ嫌悪し、人形と罵った三年前。そしてレイが目を覚ましてから抱き続けた嫉妬、あるいは憎しみ。
「死……ぬ……？　誰が？　綾波が？　そんな……ばかな……」
シンジは最悪の、しかし昨夜から最も頭を支配していた想像を現実に突きつけられ、言葉を詰まらせた。
「嘘だよ……そんなこと……」
口をついて出るのは否定の言葉だけだったが、頭のどこかで冷静に事実を受け止めている自分をシンジは嫌悪した。
「ちがう、ちがうっ、ちがうぅぅっ！」
頭を膝の間に埋めて、シンジは叫び声をあげた。
「ううっ。うううぅ……ちがうよぉ……。そんなの……ちがう……」
しかしすぐにその声は小さくなり、くぐもったすすり泣きへと変わっていく。
「うっ、うう、なんで綾波が……。いつも……どうして……んっぐぅ……うぇぇっ」
嗚咽を上げていたシンジが、突然ベッドを飛びだし洗面所に駆けこんだ。激しく嘔吐する音が、シンジの後を追ったアスカの耳に突き刺さる。
「大丈夫？」
アスカの言葉には答えず、昨日からなにも食べていないシンジは、胃液を絞り出した。
「……うぅぅ」
水を口に含み、吐き捨てる。シンジはその行為を何度も繰り返した。
蛇口から水のほとばしる音に混じってシンジがぽつりと言った。
「……もっともっと泣きわめくと思ってた。気が狂っちゃうんじゃないかと思ってたのに……。涙がもう出てこないんだ。枯れちゃったのかな……。こんなに悲しいのに……もう出てこないんだ……」
鏡に映った自分の顔をシンジはじっと見つめる。
アスカが恐る恐るガラスの破片に触れるように手を差し伸べた。シンジの身体に触れようとした。
だがアスカの手が肩に触れた瞬間、シンジは身体をびくと震わせ、身を避けた。
アスカはなにもできない自分が悲しかった。差し伸べた手は行き場を失い、また元の場所に戻るしかなかった。
だがその瞬間、シンジが遠ざかっていこうとしていた手首を掴んでぐいと引き寄せた。
突然の行為に、そしてその力の強さにアスカは驚いた。なされるがままにシンジのそばに引き寄せられる。
シンジがアスカの背に手を廻した。
「ごめん……少しだけ、このままで……」
シンジはアスカの胸に顔を埋めて泣きだした。赤ん坊のように、ただ泣いた。涙が次々にあふれ出してきた。
そんなシンジをアスカは悲しみと優しさで彩られた瞳で見つめる。
「いいよ。好きなだけ泣いていいのよ」
優しい手が、震える頭をそっとなでつけた。
ずっと、ずっと、ずっと……。

二　老人の務め

寝不足と涙の跡で腫れぼったいまぶたを地面に向けながら、僕はアスカとともに第二新東京市へ降り立った。アスカがそばにいてくれなかったら、ただ部屋の片隅で震えていることしかできなかっただろう。

綾波……どうして？　なぜ？

綾波とアスカがいなくなってから悩み続け、たどり着いた結論に果てしない暗黒に吸い込まれていくような虚脱感を感じ、しかしその恐ろしい結論をどうしても否定できず、ただうずくまって震えていたのに。

いざ事実を知ってしまうと、こんなにも冷静に対処している自分が不思議だった。

悲しくないわけがない。

綾波の紅い瞳、空色の髪、そよ風のように気持ちいい笑い声、はにかんだ笑み、うつむいて頬を赤くした顔、初めてコーラを飲んだときの目を白黒させた顔、朝の待ち合わせに遅れて息を切らせて走ってくる姿……。

綾波のことはなにを思い出してもすぐに涙がこぼれそうになる。

なのに、なのに、僕は心のどこかで覚悟をしていた？

僕にはわかっていた？

綾波が目覚めた事自体が奇跡だったってことを。

この一ヶ月間は神様がくれた贈り物だったんじゃないかって……。

今日二度目の第二新東京市を歩きながら、アスカは考える。はたしてシンジを連れてきたことが正しい行為だったのか。二人を会わせない方が悲しみが少なくて良かったのではないかと。

でもそれは、単に自分が二人の悲しんでいる姿を見たくないからかもしれない。いや二人の心が触れ合うのを見るのが怖いからかも……。

アスカはちらりと後ろを歩くシンジに目をやった。シンジはアスカと目が合うと無理にでも笑顔を作ろうとする。アスカにはそれが痛々しかった。

世界再建ビルにたどりついた二人を迎えたのは青葉だった。彼は、冬月がシンジに対して事情の説明を希望しているということを伝えた。

アスカは一足先にレイの元へ、シンジは青葉に付き添われて最上階の議長室へ向かうことになった。

シンジは終始無言だった。ひとたび口を開けば、また悲しみの言葉が口をついて、どうしようもなくなる気がしたから。

青葉は議長室の扉の前に立つと、シンジを目で促した。

シンジはうなづいて、ノックを二度した後、重厚な扉を押し開いた。

冬月が、いた。

シンジが入室して一〇分ほど経った頃であろうか、突然少年

の罵声が部屋の中から聞こえ、青葉は部屋に飛び込んだ。シンジが冬月に掴みかかっていた。
「なんでだよぉっ！　なんで綾波が死ななきゃなんないんだよぉっ！　答えてよっ！　冬月さん、なんとか言ってよっ!!」
　シンジに襟首を掴まれた冬月にいつもの威厳は見られず、青葉の目には、ただ疲れ切った老人にしか見えなかった。
「ひどすぎるよ。そんなのひどすぎるよ……。なんのために綾波は生まれてきたの？　父さんに利用されるためだけじゃないよね……。綾波にはもっと幸せになる権利があるよ……」
　冬月にすがりつくように泣きじゃくるシンジのそばに、青葉は歩み寄った。
「シンジ君、もういい。冬月さんを責めてもしかたないだろう」
　冬月のしなびた手がシンジの肩の上に力無く置かれた。
「人は理由を持って生まれてくるわけではない。生まれたことに理由があるわけではないのだよ。確かにレイ君は、碇の手で目的を持って生み出された。しかし、自らが自らの人生に意味づけを行うという点では、我らとなんら変わりないはずだ」
　青葉は涙で目を真っ赤にはらしたシンジを冬月から引き剥がした。最後に一礼を残し、そしてシンジを連れて部屋を出た。
　冬月は扉が閉じるのを確認すると、椅子に身体を深々と沈み込ませた。
「碇、我らが犯した罪は大きいぞ。私ひとりでは償いきれぬ……」

三　見つめ合う瞳

　地下六階の特別集中治療室のドアの外で、アスカは待っていた。
　廊下の向こうからシンジが、力強くはなかったが、真っ直ぐした足取りで近づいてきた。彼女はなにか言いたげにシンジの顔を見つめたが、その張りつめた雰囲気に結局声をかけることはできなかった。
「ここで待ってて」
　シンジはひとこと言うと、ゆっくりとドアを開いて中に姿を消した。
　シンジの姿が見えなくなると、アスカはずるずると壁に背をもたれて、ぺたんと廊下に腰をおろした。腕で顔を覆って、彼女はまた泣いた。
　部屋に入ったシンジはガラスの壁に向かって歩き出した。
　冷たい感触のガラス壁に両手を張り付けて、少女が横たわるベッドを見つめる。
　たった一週間ぶりなのに、数歩歩けば触れることができる距離なのに、二人の間にはどうしても乗り越えられない壁がある。
　シンジはただ少女の横顔を見つめるしかできなかった。
　レイは懐かしい視線を横顔に感じた。
　昔から感じていたその視線。
　学校で、本部で、エヴァに乗っているときも感じていた。

レイはゆっくりと顔を横に傾けた。
ガラス壁の向こうに『彼』がいた。
失われつつある力が、一瞬だけ燃え上がったような気がして、
レイはふらふらと立ち上がり、歩き始めた。
ぱさりと毛布が床に落ちた。

一歩、また一歩。

レイはふらつきながらもガラスの壁に歩み寄る。
最後の一歩は半分よろめくようにしてたどりついた。

ぺた。

レイが右手を合わせた。

ぺた。

今度は左手を。

コツン。

そして額を――。

二人は右手を、左手を、そして額を合わせて見つめあった。
分厚いガラスを通して微かにお互いの体温が伝わってくる。
レイが一瞬目を伏せ、そしてにっこりと笑みを浮かべて再び瞳を上げた。薄い桜色の唇が小さく動いた。

『ア・リ・ガ・ト・ウ』

レイは簡単に壁を乗り越えて、シンジの心に飛び込んできた。
シンジは胸が詰まってなにも言えなかった。
だから、ただ、レイの紅い瞳を見つめ続けた。
三年間の眠りから覚めたあのときのように。

第十四章　なにを願うの？

一　そばにいること

シンジに促されてベッドに戻ったレイは、スピーカーを通してシンジと話しはじめた。

「こんな姿を見せること、碇君を苦しめるってわかってる。本当はなにも知らせずに消えたかった。そのつもりだったの。でも、アスカさんに大切な事を教えてもらったから……。だから今は、なにも残さないで消えてしまうのが嫌なの。悲しみでもいい、つらさでもいい。なんでもいいから、私のこと、碇君の記憶に残していきたいの。それが碇君を苦しめるってことわかってるけど……」

レイの長い睫毛が揺れた。

「どうして、こんなに嫌なことをしてしまうの？　感情を持つということがこんなに嫌なことだったら……。私、昔の方が良かったかもしれない。なにも感じない。なにも思わない。ただ言われたことに従っていれば良かったあの頃……」

レイが少しだけ遠い目をしたので、シンジは思わず口を挟んだ。

「ほんとにそう思ってる？」

「ううん、今は違うわ。私わかったの」

と言って、くすっとレイは微笑んだ。

「碇君を苦しめたくないって気持ちは、そう、裏返しなのよ」

「なんの？」

「……だって気持ちの」

「ん、よく聞こえないよ」

「いいの。聞こえなくて」

「……けち」

「そう、私、けちなの」

そう言って彼女はまた笑う。

以前とは比べものにならないくらい豊かな表情をするレイを見て、シンジはついつぶやいてしまう。

「僕は……父さんが憎い……憎いよ……」

もはやぶつけるすべのない感情。

だが、そのつぶやきを聞きつけたレイは、とても悲しそうな顔をした。

「でも、碇司令のおかげで今の私があるの。碇君やアスカさんや、そしてみんなと知り合えたのは司令のおかげ。だからそんなこと言わないで。本来なら私は存在することさえ許されなかった。だけど今、こうして碇君と話をすることができるわ。それは碇司令のおかげなのよ」

「……そうだけど、だけど、このままじゃ綾波は……」

「私は大丈夫。碇君がいてくれればなにも怖くない。それに碇君にはアスカさんがいるわ。彼女があなたの心を癒してくれる。でも忘れないで。彼女の心にも傷はたくさんあるの。碇君が傷つけたのもあるのよ。だから優しくしてあげて。大事にしてあげて」

「……うん。なんだか僕がはげまされちゃってるね」

「……」

レイの返事はなく、かわりに聞こえてきたのは可愛い寝息。

その無防備な寝顔に、シンジは思わず頬をゆるめた。

モニター越しに見える綾波の寝顔……なんだかちょっと笑ってる。

目を覚ますまでここで見守っていよう。
そばにいよう。
後悔の無いように。
今、僕にできることのすべて。

二　ともに過ごすこと

そして次の日。レイは伊吹を呼ぶと、決然とした口調で言った。
『私を外に出して下さい』
レイはどんな説得も頑として受け付けなかった。シンジの言葉にも首を縦にふらなかった。
このまま集中治療室にいても、次第に命の灯火は弱くなるだけ。だったら、たとえ数日死ぬのが早まったとしても、外の美しい世界に触れていたい――と、レイは言った。
その言葉には誰も反論できなかった。
レイが生き続けられることを保証するのは、すなわち第二新東京市のすべてを司るMAGI-Sの能力を否定することになるのだから。
一筋の光さえ見えない希望にすがらせて、彼女をガラスの箱庭に閉じこめておく決断をできる者はいなかった。
冬月の手によって、最後の生活を送る場所が用意された。

三　もっと知り合うこと

明日にせまった引っ越しのため、アスカは治療室に入りレイの荷物を整理していた。外界の環境にならすため、レイが一般の治療室に移されて三日が経つ。
手際よく身の回りの品をまとめていくアスカを目で追い続けていたレイが、しばらくしてぽつりと口を開いた。
「優しくしてくれてありがとう」
アスカの手が止まる。
「……違う。あたし優しくなんかない」
ぼそっと言い放つと、アスカは再び手を動かし始めた。
「こんなことホントは言いたくないんだけど、あたし、レイにはなんでも知って欲しいから。嫌なところも隠したくないから……」
アスカは、シンジがレイに買ってあげたサボテンを箱に詰めながら言葉を続けた。
「あたし、レイがいなくなったら、シンジがあたしだけを見てくれるかもしれないって心のどこかで思ってる。だから優しくできるの。あいかわらずひどい女よね」
まるで自分自身を痛めつけるようなアスカの言葉に、レイはただ優しい口調で言葉を返す。
「うううん。私もきっと同じ事を考えると思う」
同情でもない、侮蔑でもない、レイのただ素直な言葉に、アスカは胸が締めつけられた。
手を休めてベッドに歩み寄り、床にひざを突いてレイと視線

を合わせる。
「……そっか。レイも死ぬほどアイツのこと好きなんだ」
「うん」
言いながら、レイは笑顔を浮かべる。
アスカはその笑顔に耐えきれなかった。
もう涙は見せない、そう心に決めたのに。
次第に顔が歪んでくる。
「……なんで、なんで、あんたみたいないい子が……。おかしいよね。ひどいよね。残酷だよね。もっと一緒にいたい……あんたともっと仲良くなりたかった……。なんでなの……やだ……やだよぉ！」
アスカが泣きながらレイにすがりつく。
「いやぁ！　死んじゃいやぁ！！　いやあぁぁ、いかないでよぉぉ……。あたしたちを置いていかないでよぉぉ……。うぅぅ……うっ……ひっく……レイぃぃッ！！！」
アスカがこれほどまでに大声を上げて泣いたのは、どれくらい久しぶりのことだったのだろうか。
泣き続けるアスカの頭を、レイはただ優しく胸にかき抱き、まるで泣きやまない赤ん坊をあやすように、柔らかく頭をなで続けた。

だいじょうぶ
私たちはひとりじゃない

時は流れ　いつか傷は癒えるわ
だから　恐れないで
別れることが終わりじゃないの
それは一つの通過点
だれもが通る記憶の道標

人はその道標をいくつも刻み　そして乗り越え
いつか振り返り　果てていく

それが生きるということ
幸せも　悲しみも　ただ時とともに

だいじょうぶ
あなたは　ひとりじゃない

第十五章　ひとつのアイが消えるとき

通常は高級官僚が利用する海に近い一等地に、レイの最後の住まいは与えられた。
アスカとシンジは青葉に手伝ってもらい、レイの持ち物をすべてそこに運び込んだ。
夏の太陽は眩しく、青い海は金色に輝いて。
そして、チルドレンの、最後の一週間がはじまった。

月曜日

今日はみんなですごすはじめての日。
碇君がおいしい料理をつくってくれた。
碇君と、アスカさんと、青葉さんと一緒。
とびっきりの楽しい食事。
でも。
いい匂いのするスープが突然目の前で消えた。
持ってたはずのスプーンが、いつの間にか毛布の上に落ちていた。
慌てて碇君が拾い上げてくれて、汚れを布巾で拭ってくれた。
『ごめんなさい。手が滑っちゃって……』
私は笑いながら言ったけど、誰も笑ってくれなかった。

火曜日

枕元に置いてある碇君にもらったサボテン。
ぎゅっと握りしめても痛くない。
ぎゅうっと握りしめると血が出てきたけれど。
やっぱりやっぱり痛くない。
『なにやってんの！』
アスカさんが私の指を口に含んで、そしておっかない顔をした。
ハンカチで傷口を縛ってくれた。
『痛くないの……』
ふと口をついて出た言葉に、またアスカさんが泣いてしまった。
『ごめんなさい……』
力強く抱きしめてくれるその腕に身体をもたれて、私は思う。
私はこれからどうなるの？
どこに連れて行かれるの？

水曜日

今日は車椅子に乗って近くの海に連れていってもらった。
碇君やアスカさんの姿が、
青い空、潮風の中、金色の海のなかにかすんでく。
気持ちいい。

身体が溶けていくみたい。

木曜日

恐ろしい夢を見たの。
血も凍るような恐ろしい夢を。
私の身体が透きとおって、なにもわからなくなる。
碇君のことを忘れてしまう恐ろしい夢を見たの。
涙がこぼれ落ちそうになったそのとき、窓の外からギターの音色が聞こえてきた。
悲しいけれど、美しいその曲は、青葉さんのお気に入り。
家の外で唄ってる……？
誰のために？
なんのために？
私が眠ってしまうまで、その音は優しく私をつつんでくれた。

金曜日

冷たい風を感じてふと目を覚ますと、碇君が窓辺に立って、星降る夜を眺めてた。
『ごめん。起こしちゃった？』
碇君が近づいてきて、そっと手を握りしめてくれた。
『ううん……。私も、見たい……』
碇君はちょっと顔を赤らめながら、軽々と私の身体を抱え上げてくれた。
力強い足取りで窓辺にたどりつくと、『ほら、今日は星が綺麗だよ』って。
私は碇君の横顔を見つめて、そしてその視線の先にある星空へ想いを馳せる。
月の光、星の輝き、波の音、潮の匂い。
『ほんとに綺麗……』
そう言って少しだけ身をよじらせると。
碇君の匂いがして。
私は身体を預けたまま、顔を碇君の胸にうずめて、ささやいた。
誰にも聞こえない声でささやいた。

すき

すき

すき

恐怖を消し去る秘密の呪文――

土曜日

『ごめんなさい……』
碇君の声がよく聞こえないの。
アスカさんの怒る声も、もう昔みたいには響かない。

永遠の静寂が私の心をつつみこむようで。
『ごめんなさい……』
碇君の温度を感じない。
せっかく手を握ってくれてるのに。
『ぬくもり』を感じないことがこんなに心細いものだったなんて、私は知らなかった。

心だけでは足りないの？
思い出だけでは寂しいの？

日曜日

私は気づく。
これが最後の朝だって。

私は思う。
目覚めるたびに朝が迎えられたら、どんなに素敵なんだろうって。

私は願う。
みんなが私のことをずっと覚えていてくれたら嬉しいなって。

そして、私は旅立つ。

「あんたがそんなことじゃ、レイも浮かばれないわよッ！」
くちびるを白くなるほど噛みしめながらアスカが叫んだ。
「現実に目をそむけないで。いつまでも逃げ続けないで」
あふれ出る涙をぬぐおうともせず、アスカは続ける。
「あんたにはレイを見届ける義務があるわ。あんたがレイを目覚めさせたのよ。最後までそばにいてあげなさい」

そしてようやく僕は立ち上がった。
アスカの心に背中を押されて歩き出す。

僕は部屋の扉を開け、

——綾波レイ、エヴァンゲリオン零号機パイロット。

一歩踏み出すとベッドに横たわる綾波の姿が見えて、

——綾波レイ、碇ゲンドウに創られし者。

彼女は僕の姿を見て嬉しそうに笑い、

——綾波レイ、僕の心を虜にしたひと。

涙をこらえながら笑顔を浮かべた僕は、

——綾波レイ、優しくて温かくて強い心を持つひと。

彼女のそばに行くと、そっと手を取る。

綾波レイ、僕は君のことをずっと好きだったよ。

『綾波……』
碇君が私の右手を取ってくれた。
『レイ……』
アスカさんが左手を握りしめてくれてる。
二人の声と温度を微かに感じる。
最後まで大好きな人たちがそばにいてくれるなんて。
きっとこれは『しあわせ』の一つ。

私のちいさな手につかみとった『しあわせ』
これが私のすべて。

ありがとう。

――私に生を与えてくれた碇司令に。

ありがとう。

――私に生きる意味を教えてくれた碇君に。

ありがとう。

――私が生きることのできたこの世界のすべてに。

そして、世界が、消えていく。
私のからだが、溶けだしていく。

碇君のかおが見えなくな……

……碇くんのかおが……いっぱ……い……？

あ……

ん……

あったかい……

いかり……くんの……くちびる……

あり……が……とう……

二〇一八年八月二十六日

紅い瞳と空色の髪を持つ少女は、
満ち足りた笑顔で、その生を終えた。

CAST

Rei Ayanami

Sohryu Asuka Langley

Sinji Ikari

Kouzou Fuyutuki

Sigeru Aoba

Maya Ibuki

Kiritake

Taiji

Captain

and you.

-Author-
いまだエヴァに心奪われ続けるＤＡＲＵ

-Hardware-
EPSON VividyTower(VM516S)
TWOTOP ViP6400/BX-ATX
MITSUBISHI Diamondtron RD17GX
PANASONIC Let's note mini

-Software-
Akira32II
MIFES for Windows
EmEditor Free Version
Adobe PageMaker6.5J
岩波国語辞典
研究社新英和中辞典

-Mindware-
EVANGELION
A SONG

-Special thanks to-
The RuRilor
エヴァに魂を惹かれた愉快な友人達

そして、すべての子供(チルドレン)たちに

また来たよ。
僕たち三人の絆の一つ。
第三新東京市を見下ろせるこの丘に。

「ママー、おにいちゃんがあたちのとったー」
「こらっ！　薫ッ！　早く返してあげなさい！」
「べーっだ！」
「はぁ。ったく、誰に似たのかしらね」
「そりゃ……」
「なによ。そのさき言ってごらんなさいよ」
「まーまー、そんなに怒っちゃしわ増えるよ」
「だーっ、気にしてること言わないのッ！」
「びぇぇぇん」
「あ、ほらほら。玲ちゃん泣かないんでちゅよ。ママがもっといいの買ってあげまちゅからねぇ」
「また甘やかすんだから」
「なに言ってんのよ！　あんたが甘やかすから薫がわがままになっちゃんたんじゃないの！」

捨てられたと思いこんでた者同士。
やっぱり甘くなっちゃうな。

父さん。
僕はあなたとちがうやり方で幸せを掴みました。

見てください。あなたの孫です。
触れることができなくて悔しいでしょう。
でも、あなたのことはちゃんと子供たちに話すつもりです。
強い人だった、尊敬できるおじいちゃんだったと。
そして、とても愛情に飢えていた人だったと。
最近、少しだけあなたのことがわかってきたような気がします。

綾波はどうしてる？
僕はあれからしばらく抜け殻みたいになったけど、綾波が言ったようにアスカのおかげで立ち直れたよ。
それから……迷惑ついでにずっと一緒に暮らしてもらってる。
僕は幸せだ。アスカと一緒になれて幸せだ。
……ふふ、綾波が少しでも怒ってくれてたら嬉しいな。
そういえば『綾波が生きてたら』って考えないようになって、もうずいぶん経つような気がする。
幸せも悲しみも、ただ時とともに……か。
人間ってやっぱり強いんだね。

また、来るよ。

僕たちが、少年と少女だった、この場所へ。

I love my world.

時が、走りだす

初出　1996.06.16
改訂　1997.01.28
初版　1998.08.16
第二版　1998.12.30

著者
DARU
daru@venus.dti.ne.jp
http://www.venus.dti.ne.jp/~daru

本作の無断複写・複製・転載を禁じます。